



卓球王国2016年4月号掲載
平成27年度全日本卓球選手権
(報道+インタビュー)

- この【王国e Book】は、月刊『卓球王国』2016年4月号掲載「平成27年度全日本卓球」報道ページ+優勝者インタビューページをPDF化し、卓球王国WEB「平成28年度全日本卓球」速報ページで公開したものです。
- 無料特別公開用ということで、本誌や有料「王国e Book」と比べて写真の画質を落としていますが、ご容赦ください。
- 閲覧は、卓球王国WEB全日本卓球速報ページでダウンロードされた方の個人的な利用に限らせていただきます。商用利用、複製したファイルの譲渡、販売、ネット等での配布を禁止します。PDFから一部のデータを抜き出したものについても同様です。
- 本ファイルの複製は原則禁止です。ただし、卓球王国WEB全日本卓球速報ページでダウンロードされた方の個人利用に限り、ご自身所有の複数の装置（パソコン、タブレット等）にコピーして閲覧することが可能です。
- お問い合わせは、卓球王国WEB「お問い合わせ」フォーム（トップページ画面左下の青字リンク）から、もしくは以下宛にお願い致します。

（株）卓球王国
電話 03-5365-1771

見開き表示の
右ページ

閲覧に際して

- PDF形式による電子書籍で、パソコンやタブレットなどでご覧いただけます。PDFの閲覧には、PDF閲覧ソフトをご使用ください。
- パソコンのモニタで閲覧する場合、ページ表示を「見開きページ」に設定すると、実際の冊子のように見開き表示されるので、見やすいでしょう。タブレットで閲覧する場合は、「単一ページ」のほうがサイズ的に見やすいでしょう。(ただしPDF閲覧ソフトによっては、「見開きページ」設定がないものもあります)
- 閲覧方法についての詳細は、以下のページ(卓球王国WEB「王国e Bookについて」)をご参照ください。
http://world-tt.com/ps_book/ebook_sample.php

見開き表示の
左ページ



五輪イヤーとなる2016年。

その幕開けとなる全日本選手権は、
水谷隼と石川佳純がそれぞれ連覇を達成。

若手の台頭、そして中堅の挑戦を受けながら、
ふたりはコート上でそれを跳ね返した。

全日本の権威は高い。
だからこそ選手は東京体育館に集い、

そして挑む。
ここにあるのは、人生を懸けた真剣勝負そのものだ。

MEN'S SINGLES

WINNER
Jun Mizutani

〈天皇杯・皇后杯〉

平成27年度

全日本 卓球選手権大会

一般・ジュニアの部

1/11→17
《東京体育館》

THE

All Japan Championships

FINAL

七番勝負

2016.1

取材=卓球王国編集部
covered by World Table Tennis editors

写真=江藤義典・奈良武
photographs by Yoshinori Eto & Takeshi Nara

WOMEN'S SINGLES

WINNER

Kasumi ISHIKAWA



各種目優勝者

MEN'S 男子シングルス
SINGLES 水谷隼
(beacon.LAB)

WOMEN'S 女子シングルス
SINGLES 石川佳純
(全農)

MEN'S 男子ダブルス
DOUBLES 水谷隼／吉田雅己
(beacon.LAB／愛知工業大)

WOMEN'S 女子ダブルス
DOUBLES 天野優／中島未早希
(サンリツ)

MIXED 混合ダブルス
DOUBLES 田添健汰／前田美優
(専修大／日本生命)

BOYS' ジュニア男子
JUNIOR 木造勇人
(愛工大名電高)

GIRLS' ジュニア女子
JUNIOR 浜本由惟
(JOC エリートアカデミー／大原学園)

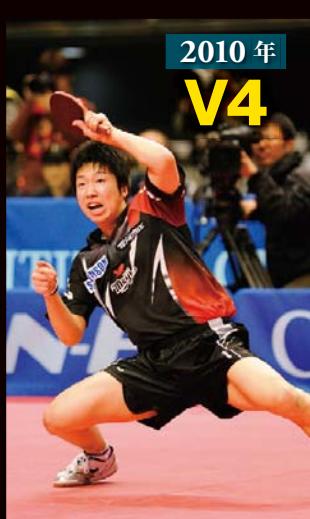
今年も最強の称号は この男へ！ 水谷隼 V8

MEN'S SINGLES

WINNER

Jun Mizutani





2010年

V4



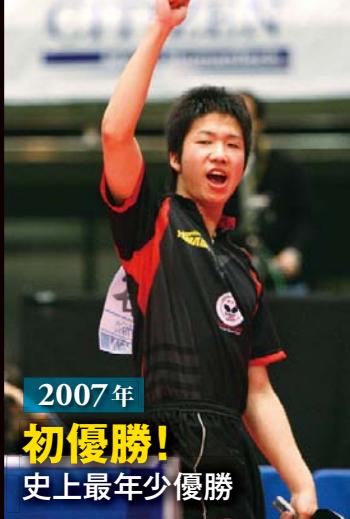
2009年

V3

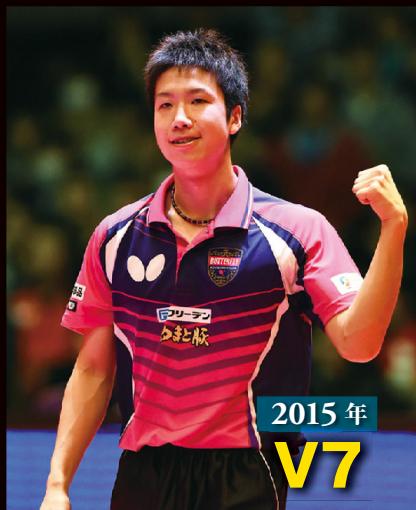


2008年

V2



2007年

初優勝!
史上最年少優勝

2015年

V7



2014年

V6 3年ぶりに
王座奪還

2011年

V5
最多連覇記録

水谷が初優勝したのは高校2年の時だ。長谷川信彦が持つ18歳9ヶ月という男子最年少記録を更新し、17歳7ヶ月での優勝。ダブルスとジュニアでも優勝し、3冠王となる。センセーショナルな優勝は、新しい時代の到来を告げ、そこから水谷の時代が幕を開けた。2連覇、3連覇、そして男子史上初の5連覇の記録を作った頃には周りが麻痺していたのかもしれない。「水谷隼は勝つて当然」という声もささやかれていた。水谷が全日本で負けること、それはもはや事件なのだ。

しかし、突如事件は起きる。6連覇がかかった12年の決勝で吉村真晴に逆转負けし、翌年は丹羽孝希に決勝で敗れた。2年連続準優勝に終わった。

「あえて敵を作つて、刺激を与えて

たのかかもしれない。前回、7度目の優勝を決めた水谷隼。同時に8回という最多タイの優勝記録は射程圏内に入った。それは卓球ファンだけでなく、水谷自身も意識していた。今大会が始まり、開会式後に行われた記者会見では「8回優勝すること、最多優勝に特別強い意識は持っていない」と語っていたが、優勝後には「初優勝をした時からこの記録を狙つていた」と本音を口にした。優勝記録が7でストップしているなら、誰よりも水谷自身が納得しないだろう。自分へのプレッシャーを隠し、水谷は戦い抜いた。

水谷が初優勝したのは高校2年の時だ。長谷川信彦が持つ18歳9ヶ月という男子最年少記録を更新し、17歳7ヶ月での優勝。ダブルスとジュニアでも優勝し、3冠王となる。センセーショナルな優勝は、新しい時代の到来を告げ、そこから水谷の時代が幕を開けた。2連覇、3連覇、そして男子史上初の5連覇の記録を作った頃には周りが麻痺していたのかもしれない。「水谷隼は勝つて当然」という声もささやかれていた。水谷が全日本で負けること、それはもはや事件なのだ。

しかし、突如事件は起きる。6連覇がかかった12年の決勝で吉村真晴に逆转負けし、翌年は丹羽孝希に決勝で敗れた。2年連続準優勝に終わった。

そ

の記録は彼に託された使命だったのかかもしれない。前回、7度

もらえば、さらにぼくは成長できる」

これは5連覇の時にインタビューで語った水谷の言葉だ。今思えば、その

言葉どおり、水谷は強くなつて帰つて

きた。一度は全日本王者の称号を失つたが、そこで腐ることなく、13年に

は日本を飛び出し、単身ロシア・ブレ

ミアリーグに参戦。技術だけではなくメンタルもタフになり、14年の全日本で3年ぶり6度目の優勝を達成した。アスリートは一度つまずくとなかなか復調のきっかけをつかめないことが多い。しかし水谷隼は非凡だった。冷静に自分を分析し、常に成長していく。

10年連続決勝進出、そして8度の優勝。すでにレジエンンドと言つても良い水谷は来年を見据えている。「齋藤清さんの8回優勝を超えるたいと思っていた。まだタイ記録なので来年も優勝したい。できれば『二桁いきたい』と宣言。齋藤清が最後に優勝したのは30歳の時だが、水谷はまだ26歳。どこまで記録が伸びるのかが楽しみな反面、水谷を脅かすようなユースターの誕生も卓球界の話題としては必要だろう。

「丹羽も(松平)健太も大島もまだまだじゃないかな。もつともっと強くなつてほしい」と会見で語った水谷。それは先輩としての苦言と期待、そして「倒せるものなら倒してみろ」という挑発にも聞こえる。このままだと来年も水谷の優勝は固い、そう思わせるほど今大会の水谷は強かつた。



水谷隼

[beacon.LAB・東京]

MEN'S SINGLES

FINAL

►男子シングルス



進化止まぬ水谷 「まだまだ自分が思い描くプレーは こんなものじゃない」

決 勝の開戦を告げる「ラブオール」のコール。8度目の優勝をかけた水谷隼と5年ぶりの決勝へ進んだ張一博の試合が始まった。

序盤は水谷がスター・ト・ダッシュ。バッくの連打、チキータ、コースの打ち分けなどで先手を取り、4-1-0とリードする。決勝での水谷は第1ゲームから仕掛けで生き、ゲームを取りにいく戦法だ。過去9年間で1ゲーム目を取られた決勝は一度のみで、序盤で流れをつかんだら最後まで切らさない。しかし、相手の張も好調で、丹羽、吉村を連破してきている。水谷はカウンターと打ち合いで点差を詰められて、第1ゲームを逆転で失う。

水谷は落ちていた。「取られたけど、なんとかなると思っていた。決勝は自信がありました」。10年連続の決勝の舞台、想定外のことが起きても挽回できる経験が備わっていたのだろう。第2ゲームからはサービス＆レシーブで優位に立ち、点差を広げていく。張は長いラリーではほとんど勝っていたが、細かいミスが足かせとなる。水谷が下がらずに前陣で打つてくるため、対応できなかった。

「準々決勝で張と対戦した」丹羽に聞いたならばどんづロックにつかまつと言っていた。ぼくは丹羽よりもパワーがあるし、連續で打てるので、とにかく全力でぶち抜こうと思っていた」(水谷)。相手の特徴を知りながら、そこをあえて突破する。決勝の第2ゲームからは横綱相撲のようだった。

今大会、水谷は前陣の攻めの厳しさがあった。バックもブロックではなく、早くも

笠原に対して積極的にチキータで攻めた水谷。「相手が嫌がっているので、無理にでもチキータを使った」



強攻のチキータと前陣の速攻

前陣のカウンター勝負でも水谷が上回った。得意の前陣で点数が取れない張は追い詰められていく



JUN MIZUTANI MEN'S SINGLES SCORE

4回戦	6, 4, 4, -9, 5	vs 宇田幸矢 (EA)
5回戦	8, 3, -10, 8, 5	vs 三部航平 (青森山田高)
6回戦	10, -8, 5, 5, 4	vs 町飛鳥 (明治大)
準々決勝	10, 16, 4, -7, 6	vs 酒井明日翔 (明治大)
準決勝	8, 4, 12, 8	vs 笠原弘光 (協和発酵キリン)
決勝	-9, 4, 4, 7, 6	vs 張一博 (東京アート)

▶ 水谷隼・男子シングルスのスコア

い打球点をとらえてボールを伸ばしていく。3球目攻撃の積極性、カウンターの精度も高く、張が得意とする前陣のフィールドで完全に上をいった。

水谷と言えば、毎回技術を進化させて全日本に臨んでいる。今年は目に見えて前陣プレーが増えており、ロビングで粘るシーンは少なく、下がつても機を見て前に出る積極性があった。そして何と言つてもチキータだろう。特に準決勝の笠原戦ではフォア前のボールに対しても強引にチキータで攻めていった。その笠原は敗戦後に「レシーブがほとんどチキータで戸惑った。しかも普通の人のチキータとは違う。下回転や横回転、微妙な上回転だつたりして、対応にてこずつた。去年は4-1で負けていたからチャンスはあると思っていたけど、予想以上に彼のプレーが変わっていて最後まで対応できなかつた」とコメント。26歳になつても化けるのが水谷の底知れない強さなのだろう。

「決勝は進化したプレーが見せられたと思う。でもまだまだ自分の思い描くプレーはこんなものじゃない。もっともつと磨いていく。ロンドン五輪の時は全日本の6連覇が途絶えて、そのままの流れでいつてしまつた。今年は勝つて良い流れのままリオ五輪に向かいたい」

過去2回の五輪では満足のいく結果が出せず、苦杯をなめた水谷。3度目の正直、日本男子悲願の五輪のメダルは、水谷の腕にかかる。チームジャパンを引っ張っていくのはこの男しかいない。

MEN'S SINGLES
RUNNER-UP
Kazuhiro Chan



ち ゃ ん か す ひ ろ
張一博
[東京アート・東京]

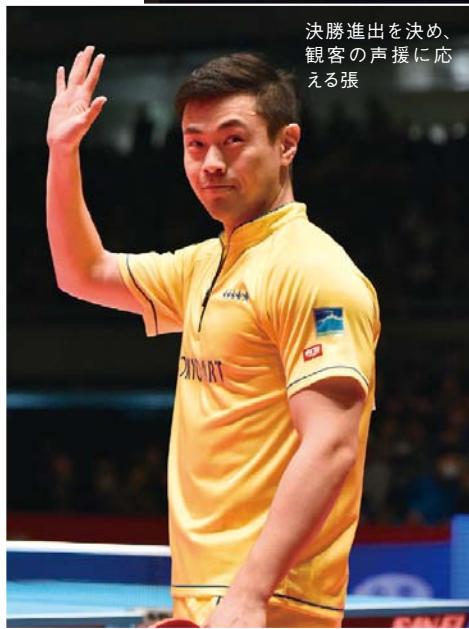


QUARTER-FINAL ↓	
4	2
張一博 東京アート	丹羽 孝希 明治大
11 - 7 6 - 11	11 - 9 7 - 11
11 - 6 11 - 6	



SEMI-FINAL ↓	
4	1
張一博 東京アート	吉村 真晴 愛知工業大
11 - 9 11 - 6	9 - 11 11 - 8
11 - 4	

リオ五輪代表を2枚抜き! 5年ぶりに



決勝進出を決め、
観客の声援に応
える張

大爆れ!!

誰もが認める実力はある。しかし、世界選手権は13年パリ大会を最後に代表から外れ、国内の試合でも敗戦が目立っていた張一博。憎たらしいほどだった全盛期の張の強さは徐々に薄れていき、かつて鉄壁と呼ばれた前陣攻守も、前中陣での両ハンド攻撃全盛の中ではむしろ時代遅れな感があった。だからこそ張は自分の強いところで勝負しなければならない。

台に張りつき、早い打球点の両ハンドで相手を振り回す。相手は打つても打つても前陣で跳ね返されるため、どんどん台から離れ、より強いボールを打とうとする。しかし、相手を下がらせてしまえば張はなおさら前陣を譲らない。バツクで広角に攻め、相手がつないだボールを狙い、体重が乗った重いフォアを打ち込む。中陣での打ち合いになつても、バツクを使わずフォアで動き切るパワー勝負を挑んだ。

準々決勝、そして準決勝ではリオ五輪代表内定の丹羽孝希と吉村真晴を連破した。丹羽戦ではバック対バックの安定感で優位にラリーを開け、丹羽がフォアへ送ると狙いすましたフォアカウンターで倍返し。完璧な丹羽対策を見せた。切り裂くような両ハンド、そして必殺のアップダウンサービスを持つ吉村に対するアッパダウンサービスを持った吉村に対しては、レシーブで無理をせずに、しっかり入れてから、ラリーに持ち込む。3本、4本とラリーが長くなると吉村は台から下がるが、張は下がらない。もし張も下

がって打ち合いに付き合つていたら勝敗は変わつたかも知れない。断固として下がらず、吉村のドライブを前陣で見事にさばき切つた。

「どの選手に対してもそうですが、ぼくは下がつたら厳しい。ラリーが長引いても頑張つて前に出ていった」(張)

相手は攻めているが、徐々に張のフィールドへ引きずり込まれ、ペースにはまつていく。決勝でも水谷とレベルの高い打ち合いを展開し、第1ゲームを先取。「まだ張一博は強い」という印象を残しただけ張は強い」という印象を残しただけ。この1年間の状態は決して良くはないが、今大会、張の勝負に対する嗅覚は研ぎ澄まされていた。

「ぼくは30歳になつたし、子どももふたりいるし、ずっと離ればなれで暮らしているから、今後をどうするのか考えていた。決勝は相手の変化についていけなかつたけど、全日本の準優勝は励みになる。迷つていただけど、卓球に対してもう少し頑張りたいと思えた。

最終日に、そして決勝に残れて本当にうれしい。ずっと勝てなくて調子が悪いことは自分でもわかつていた。だから欲を出さずに、試合前は何も考えずに練習をしていた。ずっと頑張つて、また勝てるようになると信じて練習していた

無心・無欲のプレーが張のスイングの迷いを断ち切り、5年ぶりのファイナリストとなつた。張一博という鉄壁は崩れではない。むしろ以前より強固に跳ね返す力を身につけていた。

MEN'S SINGLES
SEMI-FINALIST
Maharu YOSHIMURA



吉村真晴
[愛知工業大・愛知]



故障からの復帰戦! 名刀両ハンド炸裂するも 張のブロックに つかまる

敗戦後は下を向かずに次への抱負を語った。「より成長した吉村でリオ五輪は戦いたい」



昨年9月にリオ五輪の団体メンバーに選ばれた吉村真晴。水谷・丹羽に次ぐ3番目（当時）の世界ランキンギングを持つ、何より6月のジャパンオープントンで日本のライバルたちを連破した試合は記憶に新しい。しかし、メンバーに選ばれて以降、傷めた肩のリハビリのために国内外の試合を棄権。全日本は復帰戦となつた。

ランク決定戦で3年前に敗れた平野（協和発酵キリン）、そして6回戦では大学王者の森園（明治大）を退けて、準々決勝では大矢（東京アート）に完勝した。故障明けを感じさせないどころか、以前にも増して速く見える軽快な動き。本人も準々決勝後に「試合勘も戻ってきて、むしろ前より良い感じでプレーできている」とコメント。肩のリハビリ中は下半身の強化に取り組み、踏ん張る力が強くなつたことで、両ハンドの安定感が上がつた。

両ハンドのスピードは相変わらず閃光のようすに速く、あつという間に相手のコトを駆け抜ける。だがそれもコースがわかつていれば対応されてしまう。張のブロックは吉村が打つ先に待ち構えていた。「攻め急ぎすぎてクロスが多くなり、攻撃が単調になつた」と敗戦を悔やんだ吉村。準決勝はクレバーな攻撃が影を潜め、ブレークを狭めてしまつたように見えた。

4月からはプロ選手として活動を開始する。結果が問われる厳しい世界だが、吉村がプロになることに疑問を投げかける人などいないだろう。敗戦を糧にさらには成長することを誰もが期待している。

MEN'S SINGLES

SEMI-FINALIST

Hiromitsu KASAHARA



笠原弘光
[協和发酵キリン・東京]



東山高の先輩・森田を下し、準決勝に進出。メダル獲得を決めた笠原

着実に宿った自信という武器。 大島を飲み込み、 初の表彰台へ!

5回戦では優勝候補のひとり、大島祐哉（早稲田大）に勝利。大島の得意のロングサーブとストップに対する積極的な攻めで、十分な体勢でドライブを打たせなかつた。6回戦の松下（明治大）戦の最終ゲームのラストは、4本連続ロングサーブを出して崩し、准々決勝の森田（シチズン）には下がつてラリーを引き、1本でも多く相手にバックを使わせるコース取りを徹底した。笠原が得意とする相手の長所を封じる試合運びが冴えた。

日本リーグなど、この1年の成績を見れば、笠原の活躍は不思議ではない。「自分自身、社会人になつてダメかなという気持ちもあつたけど、去年は団体戦でも活躍できだし、自信をもつて今大会に臨めた」（笠原）。

最後まで自分を信じる「自信」。それがこそが勝敗を決める最後の1本をねじ込む武器となつた。

4

年ぶりにランク入り、そして初のシングルスの表彰台に立つた笠原弘光。かつては大学タイトルを総なめし、関東学生リーグでは水谷に敗れたのみの、54勝という大記録を打ち立て、一時代を築いた選手だ。猛烈に切れたサービスは、横下と横上を見分けるのが難しく、そこから確実に両ハンドドライブに結びつける。チキータの台頭により、以前に比べサービスの効果は薄れたが、前中陣での安定感と巧みな戦術を駆使し、接戦を次々にものにした。

シングルスの表彰台に立つた笠原弘光。かつては大学タイトルを総なめし、関東学生リーグでは水谷に敗れたのみの、54勝という大記録を打ち立て、一時代を築いた選手だ。猛烈に切れたサービスは、横下と横上を見分けるのが難しく、そこから確実に両ハンドドライブに結びつける。チキータの台頭により、以前に比べサービスの効果は薄れたが、前中陣での安定感と巧みな戦術を駆使し、接戦を次々にものにした。

「もう一度世界へ」
前陣を死守するも
吉村に射抜かれる

大矢英俊 [東京アート・東京]

打球点が早すぎるバックハンドは相手の反撃を許さず、フォアを打てばハイリスクなフルスイングカウンター。今大会、断固とした決意を持って臨んだ大矢は、6回戦で松平（協和発酵キリン）を下したが、準々決勝で吉村のサービスに強気なレシーブができず、両ハンドを打ち込まれた。

「ベスト4とか決勝進出ではなく、目指すはあの優勝カップのみ。今回は優勝しか考えていなかったので悔しいです。もう一度世界の舞台に出たいので、大会に自費参加して、世界ランキングを少しでも上げていきたい」。大矢の挑戦が始まる。

→スピードが速い吉村のドライブにカウンターが不発



Hidetoshi OYA

MEN'S SINGLES QUARTER-FINALISTS

►男子シングルス [ベスト8]

新用具で挑んだ初陣。
五輪に向けて
調子は上向き！
丹羽孝希 [明治大・東京]

大会直前に契約メーカーの変更が大きなニュースとなった丹羽。用具調整を心配する声がさやかれる中、それを吹き飛ばすかのように4回戦で怪物小学生・張本智和（仙台ジュニアクラブ）を、そして6回戦では社会人王者の上田仁（協和発酵キリン）を一蹴した。

準々決勝は、張の完璧なまでの丹羽対策に屈したが、「用具の手応えは良かったし、プレーも悪くない」と前向きなコメント。マイペースの丹羽だが、大舞台では決して期待を裏切らない。世界選手権、そしてリオ五輪に向けて、ギアを上げていくだろう。



センス抜群の精緻な
カウンターパー。
初の8強入り!

酒井明日翔

[明治大・東京]

吉田海偉が棄権したブロックで、水谷(東京アート)や横山(原田鋼業)など、社会人の強豪を倒して勝ち上がってきた酒井。大胆でリスキーな攻めで、水谷にも迫り、競り合ったが1ゲームを奪うにとどまった。

「ぼくはサービス・レシーブが読まっていたけど、水谷さんのサービスのコースは全然わからない。相手がうまかったです。でもベスト8に入れるとは思っていなかったのでうれしい」。小学生の時から天才と呼ばれてきた酒井もすでに大学生。強いメンタルの持ち主だけに、シニアでの大化けを期待したい。



水谷戦の第2ゲームでラケットを台にぶつけた破損。審判長の確認後、再開した

Asuka SAKAI



Yuki MORITA



力強さ + 俊足。
魅せたフルスイング
森田侑樹
[シチズン・東京]

連打重視のコンパクトスイングになっている現代卓球の中で、ひと際目を引く大きなスイング。苦しい体勢からでもフィジカルを活かして、無理矢理ドライブを入れていく強引とも言えるプレーだが、最後まで動き切り、吉田(愛知工業大)を下した試合は見事だった。「初めてベスト8に入って目標は達成できたけど、まだいけるチャンスがあつただけに、目標設定を上げるべきだと感じた」。

準々決勝では東山高の後輩・笠原に競り負け、悔しさを滲ませた森田。同時に、表彰台は決して不可能ではないと感じ取ったに違いない。

→足を使ったフルスイングのフォアドライブは迫力満点



魂を削る肉弾戦! 笠原が打ち勝つ



ROUND-6	
4	3
笠原 弘光 協和発酵 キリン	松下 海輝 明治大
11-9 8-11 16-14 13-15 11-7 11-8	

長い中陣でのラリー戦でお互い一步も引かない展開。笠原は下がってもコースを突き、松下を大きく動かしてミスを誘った。「岸川さんが来ると思っていた。思った以上に相手に良いプレーをされた」(笠原)



ROUND-6	
4	1
水谷 隼 beacon.LAB	町 飛鳥 明治大
12-10 8-11 11-5 11-5 11-4	

↑2年前の決勝の再戦カードは、町が1ゲーム取るのが精一杯。「どこに打っても水谷さんが待っている。前はブロックで対応していた場面でも、今の水谷さんは打ってくる。進化していると感じた」(町)

MEN'S SINGLES ROUND-6

►男子シングルス・6回戦 [ベスト8決定]



ROUND-6	
4	0
丹羽 孝希 明治大	上田 仁 協和発酵 キリン
11-8 11-8 11-6 11-9	

↑社会人2冠王の上田だが、丹羽のスピードにはついていけず、ストレートで敗れた。「スケールの大きさやサービスの種類、対応力という面では彼のほうが優れている。台から下がりたくなかったのに、うまくコースを散らされて下げられてしまった」(上田)



ROUND-6	
4	2
酒井 明日翔 明治大	坪井 勇磨 筑波大
10-12 11-5 11-6 10-12 11-7 11-4	

ともに大学1年生の対決は、酒井(手前)が勝利。坪井が得意のチキータからの展開を持ち込むが、酒井はそれを狙い打った。「もっとストップで短く止めるべきだった」(坪井)

ROUND-6

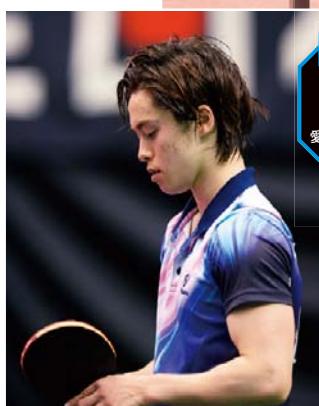


↑↑ 森田のフルスイングのカット打ち連打に村松はついていけず、あっという間に3ゲームを連取された。第4ゲームから村松が打球のスピードに慣れてきたが、同じスイングでループとスピードドライブを使い分ける森田の技にはまつた

↓必死に打ち抜きにいく森薦のボールを吉村が中陣でさばく。点数的には競っていたが、流れは吉村が握って離さなかつた。
「真晴さんのサービスの威力がすごくて、思い切ってフォアで打てなかつた。悔いが残る一戦だった」
(森薦／下写真)



↑張にブロックされるのを覚悟で粘り強くフォアドライブを連打した上村(手前)。しかし張のフォアクロスへのカウンターの精度は抜群で、上村は徐々に狙えるコースを限定されてしまった



↓先行したい大矢が第1ゲームのジュースでタイムアウトを取るも、冷静な松平が足を活かしてゲームを連取。しかし、大矢はカウンターだけでなく、前に落とす振りもかけて、徐々に松平を攻略していく。6ゲーム中5ゲームがジュースになる大接戦。それまであまり声を出していなかった大矢が最後に大爆発した



沈黙のち爆発!
我慢の大矢が賢二を振り切る!

BEST
16

男子シングルス

ベスト
16

ALL JAPAN



上村慶哉
[早稲田大・福岡]

世界選手権代表の松平健太（JTB）に勝利。「ランクに入れたことはぼくの中で自信になった。卓球をやっている人は、みんな全日本でランクに入ることが目標になる。これからはもっとサービスの種類や使い方を高めたい」（上村）

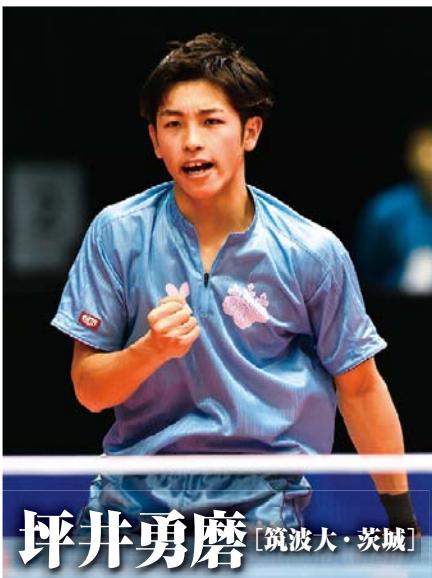


町飛鳥
[明治大・東京]

2年前の準優勝者は、4回戦で小野（協和発酵キリン）に勝利し、準決勝は完璧なカット打ちで塙野（東京アート）を下した。「塙野さんとの試合はボールが重要でした。ジャンケン勝負で勝てたことが大きい」（町）



村松雄斗
[東京アート・東京]



坪井勇磨
[筑波大・茨城]

14年インターハイ3冠王は、全日学で3回戦敗退とやや低迷気味だったが、全日本で再び上昇気流に乗った。酒井戦もチャンスがあつただけに弱気になった。チャンスがあつただけに悔しい。やってしまった……と反省しきり

MEN'S SINGLES
BEST 16

►男子シングルス [ベスト16]



森薦政崇
[明治大・東京]

代名詞であるチキータと連打だけでなく、今大会は逆回転のサービスを身につけてきた。「新しいサービスをうまく試合に組み込めたのは収穫になった」（森薦）

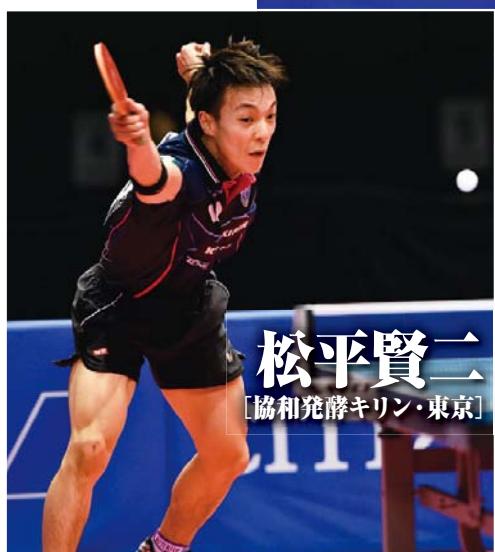


社会人王者の上田は、バランスの良い両ハンドと前陣の丁寧なプレーで勝ち上がる。「相手にとって自分がプレッシャーになれなかったのは反省点。もう少しできたかな」（上田）



上田仁
[協和発酵キリン・東京]

各ゲームとも競るも、大矢に屈した松平。動きすぎではないかと思うほど、体はキレしており、大矢のカウンターに対しても追いつく足がある。内容としては互角、最後の1本は紙一重の差だった

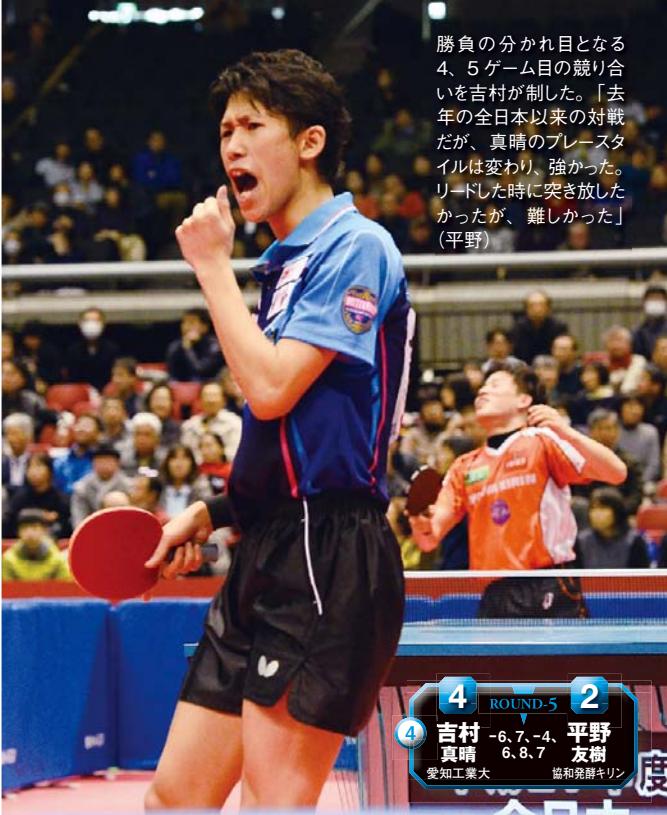


松平賢二
[協和発酵キリン・東京]



↑「ジャンケンでタマスのボールを選べたのがかなり大きい」という町が、スタートから強打炸裂。「勢いに押されて受け身になってしまった。2年前はゲームオールだったが、今回は完敗」(塩野)

4	ROUND-5	0
2	町 飛鳥 明治大	塩野 真人 東京アート



勝負の分かれ目となる4、5ゲーム目の競り合いを吉村が制した。「去年の全日本以来の対戦だが、真晴のプレースタイルは変わり、強かった。リードした時に突き放したかったが、難しかった」(平野)

ラン決のドラマ

MEN'S SINGLES
ROUND-5

►男子シングルス・5回戦[ベスト16決定]

ベスト16の選手に贈られるランキングをかけた「ランク決定戦」。32名の男たちが繰り広げる16の熱いドラマを紹介しよう



※スコア内、勝者横の数字は、ランク入りの通算回数

松下の怒濤の攻撃が試合巧者・岸川をも飲み込んだ

松下の気迫と、捨て身にも思える先手必勝卓球に、経験豊富な岸川が呑み込まれた。「調子が出る前にどんどんリードされて試合が進んでいた。チキータレシーブで抜かれたり、ロングサービスをバンバン出されて自分がレシーブミスをしたり……相手に思い切られた」と、敗因を語った岸川。若手の台頭(たいとう)に関しては、「自分も若くないとは思わない」と、対抗心をのぞかせた

↓ 吉田は森田を回り込ませてから厳しくフォアを突くも、森田のフットワークは振り切れず。逆に森田は吉田の早い攻めをしのぎ切り切った。腰のケガとラバボールへの対応に悩まされた吉田は「自分の力不足を感じた」とコメントしコートを去った

4	ROUND-5	2
3	森田 侑樹 シズン	吉田 雅己 愛知工業大

4	ROUND-5	2
初	松下 海輝 明治大	岸川 聖也 ファースト



4	ROUND-5	2
4	張 一博 東京アート	藤本 海統 日鉄住金物流

中・後陣からパワフルな両ハンドドライブを連発した藤本だが、張が集中力を維持し前陣でさばき切った。「思いどおりの展開になったが、向こうもタフで決め切れない。最後は我慢できた」(張)

ROUND-5



4 ROUND-5 0
9 大矢 英俊 3、14、7、9
東京アート

好調の柴田も、大矢のフォアカウンターをまともにくらってしまった。「最初から最後まで大矢さんの流れだった」(柴田)



4 ROUND-5 1
8 丹羽 孝希 3、9、3、-11、9
明治大

丹羽の強烈なループに手こずった田添(手前)。4ゲーム目に思い切った回り込みでゲームを奪うも、流れは変えられず



4 ROUND-5 1
4 上田 仁 2、7、7、-9、3
協和発酵キリン

勢いに乗る堀を上田が盤石のプレーで退けた。「スーパー・シードに勝つ目標は達成できたが、もうひとつ上を目指したい」(堀)



4 ROUND-5 0
2 森園 政崇 9、4、2、5
明治大

森園のフォアが炸裂、「ラリー戦に持ち込めなかった。付ける隙がなかつた」と久保田は脱帽した



世界ランキング
WR18位大島、ランク入り前に撃沈。
「すべての部分で足りない」

ここ1年、成長が著しく国際大会でも活躍の目立った大島だったが、全日本の壁は今年も厚く、集中力MAXの笠原に沈められた。練習してきたというバックハンドのカウンターでミスを連発してしまい、「少し気持ちが前に出すぎて、早く手が出てしまった」と、心理面での乱れを自認。「本当に強い選手は全日本で勝つ。まだまだぼくは、すべての部分で足りない」と、反省しきりだった

4 ROUND-5 2
2 笠原 弘光 5、-9、-1、大島 裕哉 1、4、9
協和発酵キリン 早稲田大



終始押され気味だった及川は、5ゲーム目からYGサービスを使い流れを取り戻しかけたが、時すでに遅し。「自分らしいプレーができない」としづり出すようにコメント
4 ROUND-5 2
8 松平 賢二 9、8、-7、及川 瑞基 9、-10、8
協和発酵キリン 青森山田高



4 ROUND-5 1
2 村松 雄斗 -12、8、9、9、4
東京アート 森本 耕平
協和発酵キリン
苦手とするカットに対し、緩急をつけたドライブで対抗した森本。村松はなかなか攻撃をさせてもらえなかつたが、カットで粘り切つた。「思っていたよりも良い勝負ができたが、勝負どころでミスが出た」(森本)



4 ROUND-5 2
2 酒井 明日翔 -13、12、7、横山 輝 9、11、7
明治大 原田鶴業

前陣で高速両ハンドを見せる酒井と、中陣から緩急をつける横山。横山は2ゲーム目のリードを守れず惜敗



4 ROUND-5 1
2 坪井 勇磨 -9、8、9、7、9
筑波大 軽部 介
シチズン

ロングサービスで坪井のチキータを封じようとした軽部(右)だが、坪井が巧みなコース取りで軽部のミスを誘った



4 ROUND-5 2
初 上村 廉哉 9、-6、-8、坂塚 将人 2、5、9
早稲田大 EA/帝京

前陣での攻めの速さは坂塚だが、ブレーの安定性とボールの回転量で上村が上回り、ラリー戦で差がついた



4 ROUND-5 1
12 水谷 隼 beacon.LAB 8、3、-10、8、5
青森山田高 三部 航平

水谷がサービスからの強打を三部のフォアに集め勝利。好プレーを見せた三部は「ゲームを取れて多少自信になった」



“怪物”張本に、容赦なく全日本の洗礼を浴びせた丹羽

圧勝で勝ち上がってきた“怪物小学生”張本。迎え撃つ丹羽は、これが初戦。大きな注目を集めた一戦は、第1ゲーム1-1から丹羽が14点連取。丹羽は深いツッキを多用し、張本の持ち上げるドライブをカウンターする戦術で、一気に張本を押し切った。張本にとっては完敗の内容だが、丹羽の“本気モード”を引き出した。張本の強さを逆説的に証明した一戦だったとも言える

MEN'S SINGLES ROUND-4

▶ 男子シングルス・4回戦
[スーパー・シード初戦]



↑ チキータから積極的に大きなラリーに持ち込んだ上村が押す展開。風が舞うということでコートを移動して行われた最終ゲーム、松平は6-9から4点連取するも、上村が勇猛果敢なプレーで逆転し、大金星をあげた



初戦敗退相次ぐ“魔の4回戦”

↑ 元日本代表の高木和が、「十分な練習を積み自信があった」という堀に、パワーで飲み込まれてしまった

4 ROUND-6 3
柴田 直人 -17.-8.9. 神 巧也 4.-4.9.9
(株)フジ シチズン

華々しいラリー戦が展開されたが、「神対策をしてきた」と言う柴田がストレートへのボールで要所で得点。最後は神の渾身(こんしん)の回り込みドライブをストレートにブロックしゲームセット。神はその場にうずくまつた

MEN'S SINGLES BEST 32

▶ 男子シングルス・[ベスト32]



総評

MEN'S SINGLES

今

大会のキーワードは「安定感」。水谷隼（beacon LAB）の安定感が際立った大会だった。この裏付には、一つひとつの技術力の高さがあり、天才と評される水谷と言えど、しっかりと基礎・土台が、あの「安定感」を作り上げている。

張一博（東京アート）もその安定感で丹羽孝希（明治大）、吉村真晴（愛知工業大）というリオオリンピック内定選手を破った。逆の言い方をすれば丹羽・吉村・大島祐哉（早稲田大）・森薦政崇（明治大）・吉田雅己（愛知工業大）などの若手はその安定感を打ち破らなければならなかった。彼らは実力がついてきているのにゲームメイキング、メンタル、戦う姿勢、本気で勝とうとする意識がまだまだ足らないと感じた。全日本での絶対的な王者・水谷隼を破り優勝するには、相当な覚悟と執念が必要だ。選手自身が思っている以上のレベルである。そういった部分では歯がゆさを感じた。本来であれば若手には「安定感」を打ち破るような「破壊力」が必要である。

優勝した水谷は初戦など立ち上がりが悪い、いわばスピードで水谷のフォアに振つてからバックを突いて大きく動かし、台から下がらせる戦術をとらなければ試合展開としては難しかつただろう。しかし、今大会の張は得意のカウンター、ブロックに加え、ラリー戦での強さが際立っていた。台上テクニック向上が今後の鍵となる。

五輪代表の吉村は9月のアジア選手権以来の実戦となり、その中で森薦、平野を倒してのベスト4は評価できるが、張戦ではサービスのコントロール、配球が悪すぎた。またブロックのうまい張に對してフォアハンドで攻めすぎて、振り回されて崩されること多かつた。もつと両ハンドで戦いながら隙を見てフォアで攻めるといふ

水谷と張の「安定感」を打ち破る勢いのある
若手が出て、こなかつたことは残念に思う

展開が多かったのだが、今大会はストップではなくチキータを多用し、先手をとつたり、前でのラリー戦を持つていく戦術が多かつたので、台から下がる場面が少なかつた。

張はもう少しレシーブや、タイミングの早いバックハンドで水谷のフォアに振つてからバックを突いて大きく動かし、台から下がらせる戦術をとらなければ試合展開としては難しかつただろう。しかし、今大会の張は得意のカウンター、ブロックに加え、ラリー戦での強さが際立っていた。台上テクニック向上が今後の鍵となる。

五輪代表の吉村は9月のアジア選手権以来の実戦となり、その中で森薦、平野を倒してのベスト4は評価できるが、張戦ではサービスのコントロール、配球が悪すぎた。またブロックのうまい張に對してフォアハンドで攻めすぎて、振り回されて崩されること多かつた。もつと両ハンドで戦いながら隙を見てフォアで攻めるといふ

戦術でなければ、今回絶好調の張には勝てなかつただろう。ただ故障から復帰してあそこまでの戦いを見せた点は、オリンピックを考えれば安心できる材料だ。

丹羽はスポンサーが変わり、インパクトを与えた大会であつたと思う。張本との初戦は良かつたし、張本、田添、上田戦の時には得意のサービスからの速攻が効果的に決まり、順調に丹羽ペースの試合が続いていた。しかし、張戦のようにサービスが効かない、チキータが効かない状況で、ラリー戦になつた時の戦いが課題である。

バックは早い打球点で打てるのに、動いてフォアで打つ時に打球点を落としてしまう。体の小さい丹羽が打球点を落としていくら打つても、相手にとつては脅威ではない。丹羽の怖さは前陣での速さにある。ミスのリスクはもちろんあるが、キレの良い誰も真似できない前陣速攻型を目指してもらいたい。

大島はどうやってゲームを作つていくのかという「ゲームメイク」が今後の課題だ。もつと経験や自信を重ねていき、「考える力」を養い、ゲームメイクできるようになればステージアップできるであろう。



「安定感」のあるプレーで8度目の優勝を果たした水谷

結果については小学生にしては偉業であるが、我々の物語のない張に対し、フォア前に変化サービスを出してそこから攻める。そこに慣れられてきたバック前に縦回転系のサービスを散らしながら、そこから攻めていく戦い方が効果的であった。

また張のボールはレシーブやバックハンドがバックサイドに集まつてくるので、そのボールを積極的に両ハンドで狙いにくくポイントと、ブロックのうまい張に対し緩急をつけミスを誘うポイントが戦術の軸となつていた。また、以前は台上でストップが多くなると、浮いてしまつたストップを打たれて台から下がつてしまい

（談）

大島はどうやってゲームを作つていくのかという「ゲームメイク」が今後の課題だ。もつと経験や自信を重ねていき、「考える力」を養い、ゲームメイクできるようになればステージアップできるであろう。

今大会で注目された張本智和（仙台ジュニアクラブ）は結果については小学生にしては偉業であるが、我々の物語で張本を簡単に測つてはいけない選手である。ワールドツアーやナショナルチーム合宿を経験し、この半年間で子どもの卓球から大人の卓球にシフトエンジしている段階である。今まで同年代では負けた経験がなく、試合の中でリードされた場面や、戦術的に不利になつたことも少ない。負けている状況での戦術、メンタル面での切り替える方法を今後学んでいかなければならない。

丹羽に負けた後にジュニアの準決勝で気持ちを切り替えられずに負けた。良い経験をしたとも言える。今後が楽しみな選手である。

日本
男子監督
倉嶋洋介



水谷と張の「安定感」を打ち破る勢いのある
若手が出て、こなかつたことは残念に思う

カスミ、威風堂々 3連覇!



WOMEN'S SINGLES

FINAL

►女子シングルス【決勝】

決勝第1ゲーム、ラブオール 火を噴いたバックストレー!



↑ 決勝の第1ゲーム、ラブオールから3球目パワードライブを決めた石川。1本目から声を出し、平野にプレッシャーをかけた

◀ 観客席のフラッシュや補助光を気にしていた平野。第2ゲーム途中から撮影が禁止された

KASUMI ISHIKAWA
WOMEN'S SINGLES
SCORE

▶ 石川佳純・女子シングルスのスコア	
4回戦	10、7、6、5
5回戦	vs 鳥屋真帆 (早稲田大)
6回戦	4、8、5、2
準々決勝	vs 市川梓 (日立成)
準決勝	11、-7、8、7、1
決勝	vs 宋恵佳 (中国電力)
	5、5、-11、5、4
	vs 佐藤瞳 (札幌大谷高)
	6、9、1、3
	vs 加藤杏華 (十六銀行)
	7、4、8、-9、9
	vs 平野美宇 (EA)

天

才少女の気持ちは、誰よりも「元・天才少女」が知っている。

女子シングルス決勝の第1ゲーム、0-10。大観衆の拍手が収まり、訪れた静寂を切り裂くように、強烈な3球目パワードライブがコートを駆け抜ける。決勝の1球目から「サアツ！」と大きな声を出したのは、女王・石川佳純。

この一本で勝負あり。そう思わせるほど、鮮やかな一撃だった。

対戦相手は史上最小の15歳で決勝へ進出した平野美宇。かつて、同じ「天才少女」として全日本を沸かせてきた石川は平野の心理を見抜いた。「自分より強い選手に出足で抑えられる」と厳しい試合になる」という自らの経験から、「まず出足が肝心になる」と試合の流れを読み切っていた。

第1ゲーム、4-10でスタートダッシュを決めた石川は11-7で奪取。続く第2ゲームも打球点を落とした弧線の高いドライブと、バックハンドの速攻を組み合わせる緩急でミスを誘う。

この第2ゲーム、平野は観客席のカメラのフラッシュや補助光を気にして何度も試合を止めた。それだけナーバスになっていた平野は、サービスのコントロールに苦しむ。第3ゲーム、平野が7-4とリードした場面でもサービスが台から出てしまい、石川にレシーブドライブで攻められて失点。ここから痛恨の逆転を許した。「サービスが出てしまって、そこから主導権を握られ

たのが一番大きかった」(平野)。

第4ゲーム、石川は8-4のリードから逆転を許し、「勝ち急いでプレーが単調になつた」と試合後に反省したが、第5ゲームは逆に4-9から6点連取で10-9。高速ラリーから平野のファウルに強烈なバックハンドを突き刺し、鮮やかな逆転で3連覇を決めた。

ムしか落とさない圧勝。勝つべくして勝ち、皇后杯を胸に抱いた石川佳純。アに強烈なバックハンドを突き刺し、鮮やかな逆転で3連覇を決めた。

「去年は自分に『絶対勝たなきゃいけない』というプレッシャーをかけて、苦しい試合ばかりだった。今年は練習してきたことを前面に出せば、必ず結果はついてくると自信をもつてプレーできた。第5ゲームの4-9でも焦らず、挽回できる気がしました」(石川)。

「ラリーでは負けていなかつた」という平野の発言に対し、「美宇ちゃんも強くなっていますよ。素晴らしいとは思うけど、ラリーではまだ負けないですね」と女王のプライドを垣間見せた。

敗れた平野も光明は見えた。第4ゲーム4-8から追いついた9-9の場面で、フォア前に来たサービスをチキトドライブ、カウンターのバックドライブでサウスポーのフォアサイドを切った攻めは、「石川封じ」には有効。サービス・レシーブを磨けば、勝機も見えてくる内容だった。

WOMEN'S SINGLES

WINNER

Kasumi ISHIKAWA

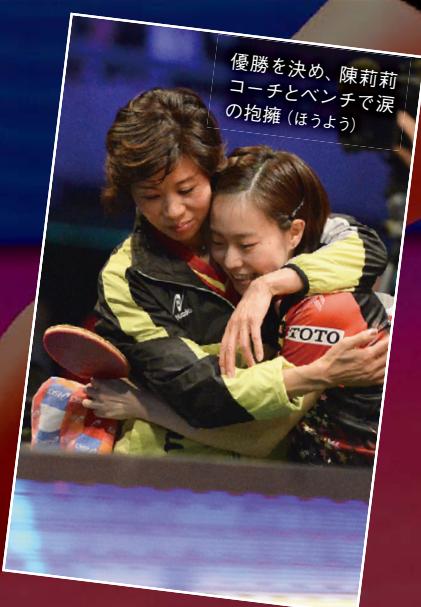
ブレない女王 「成長している限り、 抜かることはない」



石川佳純
[全農・山口]

「後ろから強い子たちが出てきても、自分が成長し続ける限り、追い抜かれることはない」。決勝後、チャンピオンとしての矜持を力強く語った石川。ベンチで支えた陳莉莉コーチはこうコメントしている。「今までと違って、今回の決勝は挽回されても迷いがなかつた。前より安心して見ることができた」。ストレートで終わるべき試合だったけど、継続的に強化してきたチキータは手数こそ多くないものの、要所で効果を発揮。より攻撃的なプレーを志向しながら、緩急で相手を封じるクレバーナ部分は失われていない。昨年はアジア選手権を左太ももの故障で欠場し、国際大会でも成績が伸びなかつたが、準優勝と結果を残した10月の女子ワールドカップから上昇気流に乗つた。「身体の動きや使い方とか、ケガの功名じゃないですけど、故障して学んだこともたくさんあつた」(石川)。

「今年の全日本では、練習してきたことが間違いない感じることができました」と語る石川。8月のリオ五輪に向け、これ以上ない最高のスタートを切つた。



FINALISTS

WOMEN'S SINGLES

RUNNER-UP
Miu HIRANO

平野美宇
[JOC エリートアカデミー・東京]



4	0
平野 美宇	伊藤 美誠
EA	SC
14-12 11-6 11-5	11-6 11-5

「準決勝は戦術もメンタルも、あそこまでやれるとは思わなかつた。ビックリしました。決勝は前半サービスから得点できなかつたのが大きかつた。彼女の両ハンドの攻撃力と速さは、中学生当時の石川にも負けていない」（中澤コーチ）

中澤コーチが目指していくスタイルに近いと語った選手は劉詩雯（中国）。奇しくも、伊藤のベンチに入った松崎太佑コーチも「平野選手のスタイルは劉詩雯に近い」と語った。「この1年で世界ランキンギング10位以内に入りたい」という平野は、さらなる高みを目指す。

史上最年少のファイナリスト 化けた！ 平野美宇は速すぎると！

決勝の終了後、良きライバルの伊藤美誠に「今までで一番強いと思った。別人でした」と言わしめた。シングルス史上最年少での決勝進出はまぐれではない。平野美宇は「化けた」しかもまだ大化けの途中らしい。昨年10月、かつてミキハウスで平野早矢香や石川佳純を指導した中澤銳コーチが、新たに平野の担当コーチとなつた。前陣での正確な両ハンドで粘るスタイルから、フォアハンドの攻撃力強化を目指し、体幹トレーニングや多球練習でのツツワーキ強化に取り組んだ。

12月の世界代表選考会では森（日本生命）にストレートで敗れているが、本人曰くこの時は「プレーがぐちやぐちやだった」という。それからわずか1ヶ月。全日本という大舞台で、平野は中澤コーチも驚くほどの成長を遂げた。

「準決勝は戦術もメンタルも、あそこまでやれるとは思わなかつた。ビックリしました。決勝は前半サービスから得点できなかつたのが大きかつた。彼女の両ハンドの攻撃力と速さは、中学生当時の石川にも負けていない」（中澤コーチ）

劉詩雯に近い」と語った。「この1年で世界ランキンギング10位以内に入りたい」という平野は、さらなる高みを目指す。

準

藤美誠に「今までで一番強いと思った。別人でした」と言わしめた。

シングルス史上最年少での決勝進出はまぐれではない。平野美宇は「化けた」しかもまだ大化けの途中らしい。

昨年10月、かつてミキハウスで平野早矢香や石川佳純を指導した中澤銳コーチが、新たに平野の担当コーチとなつた。

前陣での正確な両ハンドで粘るスタイルから、フォアハンドの攻撃力強化を目指し、体幹トレーニングや多球練習でのツツワーキ強化に取り組んだ。

12月の世界代表選考会では森（日本生命）にストレートで敗れているが、本人曰くこの時は「プレーがぐちやぐちやだった」という。それからわずか1ヶ月。全日本という大舞台で、平野は中澤コーチも驚くほどの成長を遂げた。

「準決勝は戦術もメンタルも、あそこまでやれるとは思わなかつた。ビックリしました。決勝は前半サービスから得点できなかつたのが大きかつた。彼女の両ハンドの攻撃力と速さは、中学生当時の石川にも負けていない」（中澤コーチ）

中澤コーチが目指していくスタイルに近いと語った選手は劉詩雯（中国）。奇しくも、伊藤のベンチに入った松崎太佑コーチも「平野選手のスタイルは劉詩雯に近い」と語った。「この1年で世界ランキンギング10位以内に入りたい」という平野は、さらなる高みを目指す。

WOMEN'S SINGLES
SEMI-FINALIST
Mima ITO



伊藤美誠
[スターツ SC・大阪]

準々決勝で浜本を破った瞬間、
クールに戦っていた伊藤が全身
で喜びを表現した

ミマ、初の4強 歓喜そして悔恨



準決勝の「ミウミマ対決」はまさかの完敗だった

試合後の会見で「中国選手
のようなプレーでした。ずっと
と攻めてきて、自分が打つて
いつも守りに入らず打ち
返してくる」と平野を評した
伊藤。「誰とやつても、自分
のプレーを発揮できずに終
わるのは悔しい」と涙を浮か
べて語った。中国越えを狙う
リオ五輪を前に、大きな宿題
をもった全日本だった。

6回戦で若宮（日本生命）をゲームオーバー下し、準々決勝では浜本（EA／大原学園）に4-1で勝利。第1ゲームを落としながら、絶妙なタイミングでロングサーブを混ぜ、プレーに迷いが生じた浜本を寄り切った。第2ゲーム、3-3から伊藤がレシーブをミスした時、すかさずタイムアウトを取って流れを変えた松崎コートの判断も光った。「（伊藤）ボールを拾う間合いやサービスを出す間合いが、タイムアウト後に早くなった。考える間を与えない感じだった」（浜本）

しかし、準決勝の「ミウミマ対決」はストレートで完敗。対戦成績では分が良かつたが、第1ゲームでの4回のゲームポイントを決め切れず。ファサイドから伊藤のフォア前へ出す平野の巻き込みサービス、バック深くへのロングサービスに搔きぶられ、単調になつたレシーブをサードを切つて攻められた。

昨年、「ミマ・イトウ」の名を世界に轟かせた驚異の15歳。準決勝進出が快挙と感じられないほど、度胸の据わったプレーを見せた伊藤美誠。

WOMEN'S SINGLES
SEMI-FINALIST
Kyoka KATO加藤杏華
[十六銀行・岐阜]

SEMI-FINAL	
4	0
石川 佳純 全農	加藤 杏華 十六銀行
11 - 6	
11 - 9	
11 - 1	
11 - 3	



↑ストレートで石川に敗れた準決勝。「中陣から緩急のあるボールで攻められ、タイミングがうまく取れなかった」と試合後に語った



せんぶう

旋風起こした速攻ガール 奇跡の大逆転



↑6回戦で福原を下し、ベンチの陳虹宇（チェン・ホンユ）さんと笑顔でハイタッチ

前 々回大会では高校2年でベスト8に入った加藤杏華が、社会人1年目に大ブレイク。5回戦で前田美優（日本生命）、6回戦で福原愛（ANA）と優勝候補を連破した。0-3から逆転した福原戦は今大会最大のサプライズだった。

最大の武器は、非常に打球点が早いバック表ソフトの連打。しかし、福原戦ではバック対バックでミスが続き、簡単に3ゲームを落とした。「バックのボールが全然合わなくて、4ゲーム目から少し打球点を落として粘るようにした。後は危険を冒してでもフォアを攻めました」（加藤）。思い切った戦術転換が功を奏した。試合が終わつた後、携帯電話にすごい数の着信やメールが入っていた。応援してくださる皆さんがいたから頑張れた」。

準々決勝では成長株の早田（石田卓球クラブ）を破り、ベスト4に躍進した加藤。準決勝の石川戦ではフォアにボールを集められてストレートで敗れ、課題であるフォアハンドの強化はまだ道半ば。完敗に呆然としながらも、「自分の卓球に少し自信が持てた」と手応えもつかんだ。

自信を備えた
未完の大器。
最後にのぞいた
弱気の虫

浜本由惟

[JOC エリートアカデミー/
大原学園・東京]

昨年12月の世界代表選考会で優勝し、今大会はジュニア女子で初優勝。ドイツ・ブンデスリーガでの武者修行に加え、スポーツカウンセラーのメンタルサポートも受け、試合態度も堂々としてきた浜本。

準々決勝の伊藤戦も、伝家の宝刀であるカウンターのバックドライブで伊藤のフォアサイドを打ち抜き、1ゲームを先取。しかし、伊藤の変幻自在の前陣攻守にプレーを乱された。「やればやるほど自信がなくなってしまった」と試合後に語った。



Yui HAMAMOTO

◀ 準々決勝を振り返り、開口一番「後悔しかないです」と語った浜本



QUARTER-FINAL	
4	1
伊藤 美誠	浜本 由惟
7-11 11-9 11-4 スタート SC	11-8 EA / 11-3 大原学園

WOMEN'S SINGLES *QUARTER-FINALISTS*

►女子シングルス [ベスト8]

世界で鍛えた守り。
「北海道の星」は
2年連続の8強

佐藤瞳 [札幌大谷高・北海道]

観客席から「頑張れ！ 北海道の星！」の声も飛んだ札幌大谷高3年の佐藤。昨年に続くベスト8入りは実力の証明。昨年は国際大会でも見事な成績を残した。

「石川さんに勝つことを目標にしてきた」と男子選手との特訓も積み、迎えた準々決勝の石川戦。カットの変化を正確に見極められ、攻撃に糸口を見出そうとしても、確実にブロックされた。「攻撃をしても隙がないので、普段なら当たり前に入るボールも入らなくなつた」(佐藤)。それでも1ゲームをもぎ取った佐藤。抜群のカットセンスで、来年はさらに上位を狙う。



QUARTER-FINAL	
4	1
石川 佳純	佐藤 瞳
全農	いとくち 5. 札幌大谷高
11-5 11-5 11-13 11-4	11-4



果敢に攻めた佐藤だが、石川の堅陣は崩せず

羽ばたきの時、近し。
驚異のポテンシャルを
秘めた大型左腕

早田ひな

[石田卓球クラブ・福岡]

この1年でさらに身長が伸びた早田。男性的な両ハンドドライブに、中国での修行の成果を感じさせた。

準々決勝の加藤戦は、フォア前へのアップサービスに対してレシーブが単調になり、終盤の勝負所でそこを突かれた。「美宇ちゃん、美誠ちゃんが先にベスト4に入って、自分も入らないと二人を超えないと思った。ベスト4に入って石川さんと対戦したかった」(早田)。日本女子の主力になり得る大型サウスポー。来年の全日本が今から楽しみだ。



Hina HAYATA



完璧なカット攻略も
2年連続で
美宇の速攻に屈す

ま
り
な

松澤茉里奈

[日立化成・茨城]

淑徳大時代の先輩・石垣(日本生命)を下した6回戦でのカット打ちは完璧。対カットの攻撃にまったくミスが出ず、たまらず石垣がカーブロングや反撃に出たところをカウンターで打ち抜いた。

準々決勝の相手は、昨年6回戦で敗れた平野美。『去年はバック対バックからフォアを攻められたから、私が先にフォアを突いた』と作戦どおりに2ゲームを連取したが、要所で平野美のチキータに苦しみ、ジュースにもつれた4・5ゲーム目を落としたのが痛かった。3年ぶりの準決勝進出はならず、出場した3種目はすべてベスト8だった。



平野美戦はバツ
ラリーが続出

age.
15伊藤美誠
Mima ITOage.
15平野美宇
Miu HIRANO

ベスト8の平均年齢、衝撃の18歳 壁を突き破った「黄金世代」

中学3年の平野美・伊藤・早田、高校2年の浜本、そして高校3年の佐藤。今年の全日本で女子シングルスを席巻した中高生のスーパーガールたちは、なぜこれほどまでに強いのか。その理由にスポットライトを当ててみよう。

*The breakthrough of
GOLDEN AGE*

お互いを刺激しながら、成長を続ける黄金世代の選手たち。伊藤はかつてインタビューの中で、「以前は『なんでこの年に生まれたんだ』と思っていた。今は他の人からたくさん刺激を受けるし、それがプラスになる」と語った。そして昨年リオ五輪団体代表の座をつかんだ伊藤の大活躍もまた、周りの選手を大いに刺激した。今大会2位の平野は、「相手のミスを待つスタイルでは、そこそこまで行けてもトップに勝てない」と攻撃的なスタイルにモデルチェンジ。「勝っても負けてもやるしかない」と二人で決心しました

彼女たちは年齢こそ若いが、伊藤が2歳、平野が3歳で卓球を始めるなど、卓球歴は優に10年以上。1日の練習時間も長く、卓球開始時からのトータルの練習時間は、かつての社会人選手と遜色ない。国際大会での経験も豊富で、国内大会では少ない7ゲームズマッチでの戦いに慣れていることが全日本でも有利に働く。15～17歳という年齢を迎え、ラリーで打ち負けないパワーがついてきたことで、大きく成績を伸ばしてきた。

大会の女子シングルスでベスト8に入った8人の平均年齢はなんと18歳。ちなみにベスト16に入った他の8人は平均25・25歳。上位に行くほど平均年齢が下がるという信じられない状況だ。中学3年の平野美・伊藤・早田、高校1年の加藤（礼武道場）、高校2年の浜本という若く才能ある女子選手たちは「黄金世代」と呼ばれている。今大会での黄金世代の活躍はまさに「ブレークスルー（突破）」。一気に壁を突き破った。

今

大会の女子シングルスでベスト8

に入った8人の平均年齢はなんと18歳。ちなみにベスト16に入った他の8人は平均25・25歳。上位に行くほど平均年

age.
15早田ひな
Hina HAYATAage.
17浜本由惟
Yui HAMAMOTOage.
18佐藤瞳
Hiromi SATO

For the Olympic TOKYO 2020

age.
17橋本帆乃香
Honoka HASHIMOTOage.
18牛嶋星羅
Seira USHIJIMAage.
16加藤美優
Miyu KATO

（平野を担当する中澤コーチ）。天才少女たちの視線の先にあるもの、それは2020年の東京五輪。誰もが目標として、このビッグゲームへの出場、そしてメダル獲得を掲げる。大会を迎える時は20歳前後と、少し若い。だからこそ、時間を浪費できない。無駄な時間を過ごすわけにはいかない。

もう少し上の年代に目をやれば、全日本で2年連続ベスト8の佐藤瞳（札幌大谷高3年）、昨年ベスト16の牛嶋星羅（正智深谷高3年）、今大会のジュニアで準優勝の橋本帆乃香（四天王寺高2年）という「カット三人娘」がいる。

やはり「東京五輪出場が目標」と語る佐藤と牛嶋は、佐藤がミキハウス、牛嶋が日立化成と実業団に進み、さらに腕を磨く。橋本は1月の「ドイツオープン」で世界15位のジルヤ（ドイツ）を破り、世界ランキング43位に躍り出た。

それぞれに異なる個性を備えた黄金世代の選手たち。彼女たちが放つまばゆい光は、この全日本から20年東京五輪へと架かっていく、大きな虹の架け橋だ。



↓会見では「自分の試合を楽しむにかけてくださったファンの方に本当に申し訳ない」と語った



誰もが勝利を確信した…… アイ、2年ぶりの全日本 痛恨の逆転許す

ROUND-6	
4	3
加藤 杏華 十六銀行	福原 愛 ANA
3-11	3-11
11-9	11-9
11-7	11-9
11-5	



↑促進ルールに入ったカット対決は、フォアスマッシュの決定力と安定性で上回った佐藤が勝利。「カット対策は自分の課題。チャンスボールでミスが出てしまった」(北岡)



原。2年ぶりの全日本は8強入りを目前にして突然幕を閉じた。6回戦の加藤戦、バックハンドの速攻が次々に決まり、快調に3ゲームを連取。しかし、台からやや距離を取った加藤の正確なブロックに対し、福原はバックハンドやフォアのカウンターにミスが続いた。ここ数年の全日本では出ていなかつた、攻めすぎてプレーのバランスを失う試合展開がリプレイされてしまった。

「加藤さんが苦手ということはまったくない。3-0でリードして、相手が思い切ってきた時に、気持ちが守りに入ってしまった」(福原)。大会前、馬場美香コーチが体調不良のため、かつてタッグを組んだ張莉(ちやんり)梓(さくら)コーチに交替したが、「すべて私の責任」とコメント。この悔しさは8月のリオ五輪で晴らすしかない。

WOMEN'S SINGLES **ROUND-6**

►女子シングルス・6回戦 [ベスト8決定]



0-3から
怒濤の追い上げも
あと一步……!

ROUND-6	
4	3
伊藤 美誠 スタートSC	若宮 三沙子 日本生命
11-8	11-5
11-7	10-12
8-11	6-11
11-5	

ROUND-6



バック対バックの激しい攻防は見応えがあった

両ハンドの激しいラリー戦となった新旧の「平野対決」は、平野早の細かいコース変更と緩急に、平野美が速さとストレートへの攻めで対抗。互角の熱戦、最大のポイントは第5ゲーム。平野早が10-8でゲームポイントを握るが、平野美が4点連取で逆転し、主導権を奪い返した。「相手に打たれてもしのいでいこうと思っていた。レシーブでもっと工夫したかった」(平野早)。



ROUND-6	
4	0
松澤 茉里奈 日立化成	11-8 14-12 11-9
石垣 優香 日本生命	11-9



ROUND-6	
4	0
早田 ひな 石田卓球 クラブ	11-8 11-7 11-9
土井 みなみ 中国電力	13-11



↑「大学時代(東京富士大)より練習量が減っている分、頭で考えてプレーするようになった」というサウスポーの平野容。浜本に2-4で敗れたが、サーブスから先手を取って2ゲームを奪い、肉薄した



優勝した石川に「最も印象に残った」と言わしめた一戦。裏面打法を駆使する宋は、石川と両ハンドの激しい打撃戦を展開した



北岡エリ子

[日立化成・茨城]

↑ナックルカットにフォアのスマッシュを織り交ぜ、森(日本生命)に5回戦で完勝。初のランク入りも、「もうひとつ上に行きたかった」と満足せず



土井みなみ

[中国電力・広島]

↑前々回ベスト8の強打者は2年ぶり2回目のランク入り。6回戦の早田戦は相手の間合いで戦ってしまい、サービス・レシーブでうまく崩すことができなかった



平野早矢香

[ミキハウス・大阪]

↑5回戦で田代(日本生命)との激闘を制した精神力はさすが。6回戦屈指の好ゲームだった平野美戦に惜敗し、敗戦後の会見で「今後のこととは実家に戻ってゆっくり考えたい」とコメントした



若宮三紗子

↑ベスト16という成績には「最低限のところで終わってしまったという感じ」とコメント。「昨年は海外のトップ選手にも結構勝てたけど、その安定性と思い切りの良さをずっと出せる選手になりたい」(若宮)



福原愛

[ANA・東京]

◆「技術や戦術より勝つことが第一優先」と4回戦後に語った福原。2大会ぶりの全日本で、勝利への思いの強さゆえにプレーが攻撃に偏(かたよ)ってしまった。心身ともにベストの状態ではなかったか



石垣優香

[日本生命・大阪]



宋惠佳

[中国電力・広島]

◆悲願のランク入りを果たし、石川とも好ゲームを展開。裏面打法は抜群の安定感で、勝負所ではロングサービスから強気に攻めた。まだ20歳、ここからの飛躍に期待だ



平野容子

[オーケワ・和歌山]

↑フットワークを生かして、左腕から威力あるフォアドライブを連発。4回戦で森薫(日立化成)を破る金星を挙げた。日本リーグ2部のオーケワから、初の全日本ランカーが誕生

宿命の対決。ジュースに次ぐジュースを粘り倒した石垣

女子ラン決随一の激戦。天野は簡単には強打にいかず、難しいボールはバック表ソフトのストップを多用して粘る。どのゲームももつれにもつれたが、体を絞り動きの切れを増した石垣が死闘を制す。特にフォアクロスへの反撃、サイドを切るコース取りが素晴らしかった。「ファイナル4では石垣さんが打ちあぐんだ感じがあったけど、全日本では自分以上に『絶対入れてやる』という気持ちが石垣さんにあった」(天野)

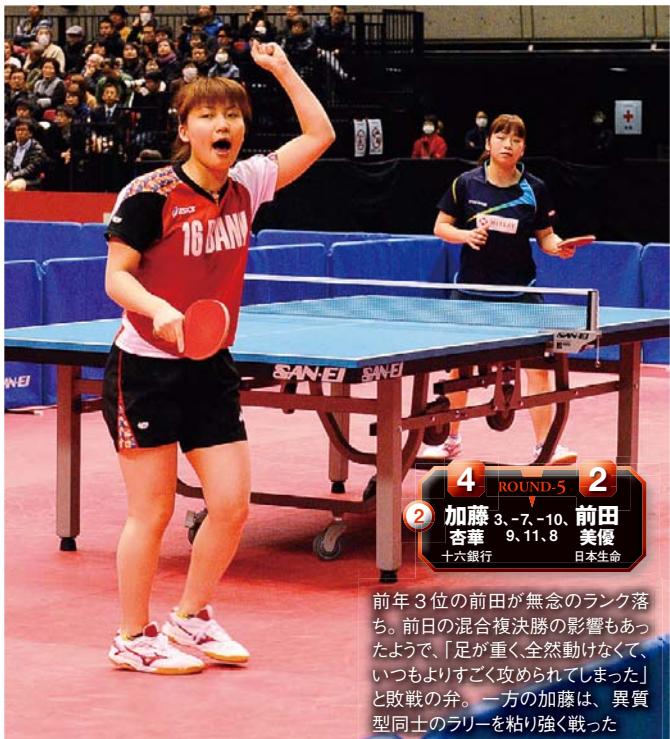
4 ROUND-5 3
6 石垣 優香 -9.9.-9.5.13 優
日本生命 サンリツ

CITIZEN

SAPPORO

SAN-EI

ALL JAPAN CHAMPIONSHIPS



↑ 伊藤が緩急を付けた粘り強いプレーで阿部の異質速攻を攻略。敗れた阿部だが「全日本で自分らしい試合ができるのはたぶん初めて」と充実の表情も。対する伊藤は「すごく胃が縮むような試合で、負けてもおかしくなかった」

↑ 独特の変化のある北岡のカットを森は打ちあぐね、最後まで自分のペースに持ち込めず。「(促進ルールは)予想どおり」と北岡は終始冷静にプレー

ROUND-5



今大会で引退となる山梨が松澤に速攻で1ゲーム先取。淑徳大の後輩相手に持ち味を出したラストマッチとなった

早田がサービス、レシーブ、攻撃力で堅実プレーの山本を圧倒。「回転がすごくブロックが入らなかった」(山本)

中盤から若宮がきっちり動いて攻めて逃げ切る。「もう少し勝って愛媛銀行の名前を全国に出したかった」(藤井)

序盤は強打が入らず、調子の上がらない福原に対し先行する場面もあったカットマン牛嶋だが、中盤から離された



バック対バックからの我慢比べのラリー戦。一進一退の攻防は最終ゲームに突入したが、常に1~2本リードのまま平野が逃げ切った。ベテラン平野は持ち味の粘り強さを出し切るも、辛勝に厳しい表情。一方、田代は「リードした時に攻める気持ちが落ちてしまう。平野さんは冷静だった。特にやりづらい技術はないが、自分のことを落ち着いて観察していた」(田代)

※スコア内、勝者横の数字は、ランク入りの通算回数

4 ROUND-5 3
⑬ 平野 -9, 7, -8, 田代
早矢香 6, 8, -11, 6 早紀
ミキハウス 日本生命

ラン決のドラマ

全日本に出場するすべての選手が挑む“全日本ランカー”
(=ベスト16)の称号。この栄誉をかけたランク決定戦、
通称「ラン決」で、16の熱いドラマが繰り広げられた

WOMEN'S SINGLES = ROUND-5

►女子シングルス・5回戦 [ベスト16決定]



石川がサービスと相手フォアへの厳しい攻撃で圧勝。「今の実力を自覚し、また来年に向かって頑張りたい」(市川)

ドライブでなかなか決定打が打てない鈴木。変化カットにオーバーミスが出て、佐藤のカーブボリングも打ちあぐんだ

小道野が平野のサービスに苦しむ。平野は小道野のバック表ソフトを苦にせず、逆にカウンターで狙い圧勝

バック対バックでの主導権争いから攻めきった宋に軍配。「最後は自分で攻めていかないと勝てない」(宋)



日本
女子監督
村上恭和



受け身にならず、向かっていく姿勢を貫いた石川。
平野は迷いながらも攻撃的な新スタイルで活躍

総評

WOMEN'S SINGLES

3

連覇を達成した石川佳純（全農）は、受け身にならず、向かっていく姿勢で戦い抜いた点がすばらしかった。格下の選手が相手でも序盤で様子見はせず、技術的には、男子選手と練習してきたことで台から少し距離をとつてのプレーもできるようになり、以前のように下げられてから体勢が崩れることがなく、後ろから巻き返すプレーも増えている。より隙のないプレースタイルになつており、うまくまとまつてきているように見える。次の世界選手権、リオ五輪でもレベルの高いプレーを見させてくれるだろう。

平野美宇（EA）は、安定志向から攻めのスタイルに変更しているところで、ここ最近はミスも多くかみ合っていないプレーが多かった。今大会もプレーに迷いが見られ、大会の序盤は空回りの印象もあったが、接戦を乗り越えたことで徐々に自信を持つて攻めのプレーができるようになつていった。それがうまくかみ合つたのが伊藤美誠（スターツSC）との試合。下回転系ロングサービスを出して相手のバックドライブを狙い打つなど、今までのミス待ちのプレーではない戦いぶりで完勝した。初の決勝は少し神経質になつてしまつた部分はあるが、新たなスタイルでの決勝進出は評価できるだろう。

準決勝で平野に敗れた伊藤美誠は、阿部恵（サンリツ）、若宮三紗子（日本生命）、浜本由惟（EA／大原学園）ら、実力者を破つての準決勝進出で自分の実力を出し切つたと思う。相手を見ながらプレーを変えられる彼女の持ち味が出ていたし、15歳とは思えない「キャリア」を感じさせる戦いぶりだった。平野戦に関してはリードした1ゲーム目を落とし、続く2ゲーム目も早めのタイムアウトから逆転されたのが響いた。やはりタイム

を取つたゲームを勝たなければ、流れを取り戻すのは難しい。平野が伊藤の想像を超えた攻めを見せてきて、それでも対応できなかつたようだ。表ソフトの選手はどうしても技術が限定され、彼女もその弱点を突かれた。今後、伊藤はラケットを反転しての裏ソフトによるバックドライブなど、もっと技術の幅が求められるだろう。「伊藤は怖い」というのは世界中に知れ渡つており、今回の平野と同じ状態で世界の相手も向かってくるので、それを見越して先に技術、戦術を成長させてほしい。

近年、ナショナルチームとしては、ホープス世代をジュニアサーキットに参加させ、ジュニア世代をワールドスターというように、ひとつ上のカテゴリーに若い選手を積極的に出しており、それが成長の要因になつていて感じている。昨年も若手が台頭し、「芽を出し始めた」と感じたが、今大会は一気に「開花した」という印象だ。若い選手がひとつステップアップした全日本と言えるだろう。次の課題としてはいかにして中国に追いつくか。そういうレベルまで飛躍できるように、若手とベテランを競争させながらさらなる強化を続けていきたい。（談）



史上最年少での決勝進出を果たした平野

を向けた場合はラリーの安定性だけでは勝てないので、パワーのある選手に対して、打たせない技術、より多彩なレシーブテクニックなどが必要になるだろう。加藤に敗れた福原は、5回戦でも牛嶋星羅（正智深谷高）に苦戦するなど、今大会は集中しきれていない感があつた。福原は大会に向けて練習をやり込んで来ている時は滅法強いが、今回はいつもの強さが感じられなかつた。加藤戦は中盤から相手のミスが多くなり、それに対し、もっと強いボールを打とうとして逆にミスが出てしまい、崩れたのが敗因だろう。結果はベスト16止まりだが、当然ながら戦術の幅、技術レベルは高い選手なので、世界選手権、リオ五輪に向けての心配はしていない。故障のないよう気をつけて、十分な準備ができれば世界では福原らしいプレーを見させてくれるはずだ。

平野、伊藤と同じく中学3年の早田ひな（石田卓球クラブ）も、ベスト8と結果を残した。彼女も技術、戦術の変更をしている中で、不安定な部分はあつたが、その中の勝ち上がりは評価したい。早田は、平野や伊藤と比較すると、レシーブが安定重視になるのが課題だ。自分から点を取りにくいくリスクのあるレシーブも身につけていけば、さらに伸びていくだろう。

加藤杏華（十六銀行）は、6回戦で福原愛（ANA）に逆転勝ちし、堂々のベスト4入り。彼女はラリー戦の強さが特長で、福原戦も序盤は相手のテンポについていけなかつたが、徐々に慣れてくると自分の良さが現れてきた。加藤は、今年度の全日本団体でも活躍するなど、非常に力をついている選手のひとり。ただし、世界に目

※用具は全日本で使用したもの。試合名のない戦績は、全日本のもの(年は年度表記)。 ●ラケット(グリップ) ▲フォア面(表面)ラバー(厚さ) ★バック面(裏面)ラバー(厚さ)
 ※名前横の丸数字は、ランク入りの通算回数。EA=JOC エリートアカデミー

R=Ranking

R 4 笠原弘光 Hiromitsu Kasahara (2)



協和発酵キリン・東京／静岡県出身、26歳。早稲田大卒。13年混合複3位。10年全日学優勝。14・15年全日本社会人複3位。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／特注(ZLF／FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 3 吉村真晴 Maharu Yoshimura (4)



愛知工業大・愛知／茨城県出身、22歳。野田学園高卒。11年優勝、14年混合複優勝。15年世界選手権混合複準優勝。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／特注(ZLC／FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 2 張一博 Kazuhiro Chan (4)



東京アート・東京／中国出身、30歳。青森短期大卒。10年準優勝、12年6位。14年ビッグトーナメント優勝。左S裏・裏／ドライブ型。●紅双喜／キョウヒョウ皓III(FL) ▲バタフライ／テナジー05(特厚) ▲★バタフライ／テナジー05FX(特厚)

R 1 水谷隼 Jun Mizutani (12)



beacon.LAB・東京／静岡県出身、26歳。明治大卒。06～10・13・14年優勝、06～09・11年複優勝。左S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／特注(SUPER ZLC／ST) ▲★バタフライ／テナジー80(特厚)

R 8 大矢英俊 Hidetoshi Oya (9)



東京アート・東京／三重県出身、27歳。青森短期大卒。12年3位。13年東京選手権優勝、15年全日本社会人ベスト8。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／特注(ZLC／FL) ▲★バタフライ／テナジー80(特厚)

R 7 酒井明日翔 Asuka Sakai (2)



明治大・東京／岐阜県出身、19歳。EA／帝京卒。13年11位・ジュニア準優勝。15年全日学選抜準優勝。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／ティモボルALC(FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 6 丹羽孝希 Koki Niwa (8)



明治大・東京／北海道出身、21歳。青森山田高卒。12年単・複優勝、14年3位。11年世界ジュニア優勝。13年全日学優勝。左S裏・裏／ドライブ型。●VICTAS／カルテットAFC(FL) ▲★VICTAS／V>15エキストラ(MAX)

R 5 森田侑樹 Yuki Morita (3)



シズン・東京／石川県出身、28歳。中央大卒。13年9位。13年全日本社会人3位・複準優勝、15年全日本社会人準優勝。左S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／SK7(FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 12 森薦政崇 Masataka Morizono (2)



明治大・東京／東京都出身、20歳。青森山田高卒。14年15位、13・14年複優勝。14・15年全日学優勝。左S裏・裏／ドライブ型。●紅双喜／キョウヒョウ王(FL) ▲バタフライ／テナジー05(特厚) ★ニッタク／ファスタークG-1(特厚)

R 11 上村慶哉 Keiya Uemura (初)



早稻田大・福岡／熊本県出身、20歳。希望が丘高卒。15年全日学単ベスト16・複準優勝。15年全日学選抜優勝。左S裏・裏／ドライブ型。●紅双喜／キョウヒョウ王III(FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 10 松平賢二 Kenji Matsudaira (8)



協和発酵キリン・東京／石川県出身、26歳。青森大卒。11年3位・混合複優勝。14年全日本社会人優勝。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／SK7(ST) ▲バタフライ／テナジー05(特厚) ★バタフライ／テナジー80(特厚)

R 9 松下海輝 Kaiki Matsushita (初)



明治大・東京／熊本県出身、22歳。希望が丘高卒。13年全日学選抜3位。14年全日学選ベスト8、15年全日学3位。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／水谷隼(FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 16 上田仁 Jin Ueda (4)



協和発酵キリン・東京／京都府出身、24歳。青森大卒。13年3位。12年全日学優勝。15年全日本社会人単複優勝。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／インナーフォースZLC(FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 15 町飛鳥 Asuka Machi (2)



明治大・東京／神奈川県出身、21歳。青森山田高卒。13年準優勝。14年グランドファイナルU21優勝。右S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／水谷隼(特注/AN) ▲バタフライ／テナジー05(特厚) ★バタフライ／テナジー64(特厚)

R 14 坪井勇磨 Yuma Tsuoboi (2)



筑波大・茨城／埼玉県出身、18歳。青森山田高卒。13年8位。11年全中優勝。14年インターハイ三冠。左S裏・裏／ドライブ型。●バタフライ／インナーフォースレイヤーZLC(FL) ▲★バタフライ／テナジー05(特厚)

R 13 村松雄斗 Yuto Muramatsu (2)



東京アート・東京／山梨県出身、19歳。EA／帝京卒。14年ユース五輪・世界ジュニア準優勝。右S裏・裏／カット型。●VICTAS／松下浩二オフェンシブ(FL) ▲バタフライ／テナジー64(特厚) ★TSP／カールP-1Rソフト(薄)

※用具は全日本で使用したもの。出身校のあの試合名のない戦績は、全日本のもの。 ●ラケット(グリップ) ▲フォア面(表面)ラバー(厚さ) ★バック面(裏面)ラバー(厚さ)
 ※名前横の丸数字は、ランク入りの通算回数。EA=JOC エリートアカデミー R=Ranking

R 4 加藤杏華 Kyoko Kato (2)



十六銀行・岐阜／岐阜県出身、19歳。県立岐阜商業高卒。13年8位。13年インターハイ複勝優勝。右S裏・表/前陣速攻型。●スティガ/クリッパー・ウッド(FL)
 ▲バタフライ/テナジー 05(特厚)★ニッタク/モリストSP(厚)

R 3 伊藤美誠 Mima Ito (2)



スタートSC・大阪／静岡県出身、15歳。昇陽中生。14年8位・ジュニア優勝。右S裏・表/前陣速攻型。●ニッタク/アコースティックカーボン(ST)▲ニッタク/ファスターク G-1(特厚)
 ★ニッタク/モリストSP(厚)

R 2 平野美宇 Miu Hirano (2)



EA・東京／山梨県出身、15歳。稻付中生。13年ジュニア準優勝、14年7位。右S裏・表/ドライブ型。●スティガ/クリッパー・ウッド(FL)▲バタフライ/テナジー 05(特厚)★バタフライ/テナジー 64(特厚)

R 1 石川佳純 Kasumi Ishikawa (10)



全農・山口／山口県出身、22歳。四天王寺高卒。10・13・14年優勝。左S裏・表/ドライブ型。●バタフライ/インナーフォースレイヤー ALC (FL)▲ニッタク/ファスターク G-1(特厚)★バタフライ/テナジー 64(特厚)

R 8 佐藤 瞳 Hitomi Sato (2)



札幌大谷高・北海道／北海道出身、18歳。尾札部中卒。14年6位。13年インターハイ準優勝。右S裏・粒/カット型。●バタフライ/特注(5枚合板/SI)▲バタフライ/テナジー 64(特厚)★バタフライ/フェイントロングII(超極薄)

R 7 浜本由惟 Yui Hamamoto (初)



EA・大原学園・東京／大阪府出身、17歳。稻付中卒。15年グランドファイナルU21準優勝。右S裏・表/ドライブ型。●バタフライ/インナーフォースレイヤー ZLC (FL)▲バタフライ/テナジー 05(特厚)★バタフライ/テナジー 80(特厚)

R 6 早田ひな Hina Hidaka (初)



石田卓球クラブ・福岡／福岡県出身、15歳。中間東中生。14年ジュニア準優勝。13・14年全中優勝。左S裏・表/ドライブ型。●スティガ/クリッパーCC (FL)▲バタフライ/テナジー 05(特厚)★バタフライ/テナジー 05FX(特厚)

R 5 松澤茉里奈 Marina Matsuzawa (4)



日立化成・茨城／長野県出身、23歳。湖徳大卒。12年3位。10年全日学選抜優勝。11年全日学優勝。右S裏・表/ドライブ型。●バタフライ/劉詩雯 (FL)▲バタフライ/テナジー 05(特厚)★VICTAS/V>15エキストラ(MAX)

R 12 平野早矢香 Sayaka Hirano (13)



ミキハウス・大阪／栃木県出身、30歳。仙台育英学園高卒。03・04・06～08年優勝。右S裏・表/ドライブ型。●スティガ/クリッパー CR WRB (FL)▲紅双喜/ヨウヒヨウIII(特厚)★バタフライ/テナジー 64(特厚)

R 11 平野容子 Yoko Hirano (初)



オークワ・和歌山／富山県出身、23歳。東京富士大卒。12年複3位。左S裏・表/ドライブ型。●ニッタク/アコースティック(ST)▲バタフライ/テナジー 05FX(特厚)★ニッタク/ファスターク C-1(特厚)

R 10 若宮三紗子 Misako Wakamiya (8)



日本生命・大阪／香川県出身、26歳。尽誠学園高卒。9～12年複優勝、13年単・混合複3位。左S裏・表/前陣速攻型。●TSP/スワット(ST)▲VICTAS/V>15エキストラ(MAX)★ニッタク/モリストSP(厚)

R 9 福原 愛 Ai Fukuhara (14)



ANA・東京／宮城県出身、27歳。青森山田高卒。11・12年優勝。15年ワールドツアード3大会優勝。右S裏・表/前陣速攻型。●バタフライ/特注(FL)▲バタフライ/スピニアート(特厚)★アームストロング/アタック8(特注)

R 16 土井みなみ Minami Doi (2)



中国電力・広島／宮城県出身、26歳。明徳義塾高卒。13年7位。14年トップ123位。右S裏・表/ドライブ型。●バタフライ/インナーフォース ZLC (ST)▲ヤサカ/翔龍(特厚)★バタフライ/テナジー 64(特厚)

R 15 石垣優香 Yuka Ishigaki (6)



日本生命・大阪／愛知県出身、26歳。淑徳大卒。14年3位。15年ハンガリー・スペイン・フィリピンオープン3位。右S裏・表/カット型。●ニッタク/キムギヨンア(ST)▲ニッタク/P12(2.0mm)★ニッタク/閃靈(薄)

R 14 宋 恵佳 Eka So (初)



中国電力・広島／東京都出身、20歳。青森山田高卒。14・15年全日本社会人3位。右P裏・表/ドライブ型。●バタフライ/インナーフォース ZLC (中国式)▲ヤサカ/ラクザ7(特厚)★バタフライ/テナジー 05(特厚)

R 13 北岡エリ子 Eriko Kitaoka (初)



日立化成・茨城／高知県出身、24歳。中央大卒。12年複3位。10年全日学準優勝。13年全日学復優勝。13年全日学選抜3位。右S裏・表/カット型。●VICTAS/松下浩二(FL)▲ヤサカ/ウォーリー(厚)★ニッタク/閃靈(薄)



世界へ向けて視界良好!
新コンビの船出は
Vで開幕!!



↑「ペアを組んで、改めて水谷さんのスゴさがわかったし、自分の未熟さも感じた」と吉田(左)。偉大な先輩から多くを学び、さらなる高みを目指す。

DOUBLES **MEN'S**

男子ダブルス



大島祐哉(右)・**上村慶哉**
[早稲田大・東京]



吉村・丹羽(愛知工業大・明治大)の五輪代表ペアをストレートで下した早稻田大のエースペア。準々決勝ではサービスを効かせ、松平・上田に逆転勝利で表彰台へ

→山本が平野の思い切りの良さを引き出し、森田・軽部ら日本リーガーペアに連勝。松生・鹿屋にもフルゲームまで追つたが、最後はエッジボールに泣いた



山本勝也(右)・**平野晃生**
[早稲田大・東京]



水谷隼(左)・**吉田雅己**

[beacon.LAB・東京／愛知工業大・愛知]

岸川(ファースト)とのペアで5度の優勝を誇る水谷が、吉田とのコンビで初出場・初優勝。4回戦では3連覇を狙った森薗・三部(明治大・青森山田高)をストレートで下すなど、落としたゲームはわずか2つで優勝街道を邁進した。打って良し、守って良し、戦術にも長けたふたりのペアリングは抜群。優勝後の会見では「目標は世界選手権での優勝」(水谷)、「僕がもっとレベルアップする必要がある。世界で勝てる実力をつけたい」(吉田)とそれぞれが語り、世界での飛躍を誓った。経験を重ねることで、このペアはまだまだ強くなりそうだ。



閃光バックドライブ炸裂
伏兵・リコペアが決勝進出!



松生直明(左)・**鹿屋良平**

[リコー・東京]

Best 8



森田侑樹(右)・**軽部隆介**
[シチズン・東京]

得意のカット打ちで塙野・村松(東京アート)を完封するも、昨年と同じくベスト8止まり



村井桂(右)・**東勇渡**
[法政大・専修大・東京]

村井がトリッキーなプレーで相手をかく乱。強敵の張・高木和(東京アート)から会心の勝利をあげて勝ち上がる

松平賢二(右)・**上田仁**
[協和发酵キリン・東京]

全日本社会人優勝ペアはレシーブからグイグイ仕掛けて大島・上村からリードを奪ったが、表彰台には届かず



天野優 (左)・中島未早希

[サンリツ・東京]

昨年まで2連覇中の平野・石川を準決勝で破った全日本社会人優勝ペアの天野・中島が初優勝。「ダブルスのフトワーク練習はどのペアにも負けないくらいやってきた」(天野)と語った快速フトワークは、芸術的と言っても過言ではない。

すばやい動きから、練習量を感じさせる巧みなコース取りの連打でたたみ掛け、一気に頂点へと駆け上がった。「今大会はすごく調子が良くて、思い切ってプレーできた。日本リーグでも使ってもらっているので、もっとチームに貢献できるようなペアになりたい」(中島)。



鍛え上げた“足技”で初Vへ駆け上がる



DOUBLES WOMEN'S

▶女子ダブルス



とにかく速い、ふたりのフトワーク。抜けそうなボールにも追いつき、返球したボールが、相手のミスを誘う展開が多く見られた



フルゲームまでもつれた初戦の都筑・伊井(朝日大)戦を乗り越えると、徐々に調子を上げて準優勝の土井・土田。左右からたたみ掛けのような連打を見せて、準優勝に輝いた。「(準優勝は)まさかという感じだけど、これから自信になる。決勝は分が悪い相手だが、決勝の舞台なら何か起こるかも、と思っていたけど勝負の世界は甘くなかった」(土田)



Best 8



森田彩音 (右)・加藤結有子
[EA・帝京・東京]

ともに安定した両ハンドを武器にベスト8入り。1回戦からの登場だったが、EA勢として意地を見せた

小道野結 (右)・高橋結女
[早稲田大・東京]

コンビネーションの良さが光るが、池田・北岡戦では、相手のリズムに合わなかつたか、1ゲームを奪うにとどまった



平野早矢香 (右)・石川佳純

[ミキハウス・大阪／全農・山口]



3連覇を狙ったが、天野・中島の連続攻撃に苦しめ準決勝で敗退。

「サービス、3球目で相手に押されてラリーに入ってしまった。ダブルスの敗戦は正直、悔いが残っている」(平野)



平真由香 (左)・田口瑛美子
[正智深谷高・埼玉]

フォアで果敢に攻め込んだインハイ優勝ペア。土井・土田ペアからも2ゲームを先取したが、逆転負け

森蘭美咲 (右)・松澤茉里奈
[日立化成・茨城]

全日学優勝ペアの鈴木・安藤(専修大)、山本・明神(中央大)らに勝利しベスト8入り

カットと攻撃の変則ペアが、シードペアを次々に破り準決勝進出。池田が精度の高いブロック&カウンターで対応し、息の合ったプレーを見せた



池田好美 (右)・北岡エリ子

[日立化成・茨城]

田添健汰 (右)・前田美優

[専修大・東京／日本生命・大阪]

昨年優勝の吉村・石川（愛知工業大・全農）が不出場、シード勢も敗れるなど、混戦模様の混合ダブルスは平成24年度大会の優勝ペアが3年ぶりにタイトルゲット。前回優勝時はともに高校生だったが、大学生、社会人となり、力強さ、クレバーさを増したプレーで2度目の優勝を飾った。

決勝では2ゲーム目から田添の両ハンドドライブが面白いように決まり、宮本・高橋を圧倒した。「もう一度優勝したいと思っていたので、すごくうれしい。楽しんでやろうと心がけたけど、それが優勝という結果につながったと思う」（田添）。



火を噴く田添の豪打 3年ぶりのミックス制覇



宮本幸典 (右)・高橋真梨子

[中央大／同志社大・京都]



練習できたのはわずか1日のみだったという宮本・高橋が、接戦を次々に制し、決勝進出。ドライブ、ミートと多彩な打法と球質を操る高橋と、強烈なフォアの一発がある宮本の長所がかみ合い、快進撃を見せた。「2位はすごいけど、優勝は遠かったですね。チャンスはあっただけにもったいなかった」（宮本）。

↑決勝は1ゲーム目こそ奪われたが、2ゲーム目以降は前田がきっちりコースをついて攻め、田添の一発につなげた

DOUBLES MIXED

►混合ダブルス



千葉悠平 (左)・平真由香

[埼玉工業大／正智深谷高・埼玉]



◀千葉の巧みなボールコントロールと平の思い切りの良いフォアドライブがマッチ。宮本・高橋からもリードを奪ったが逆転負けを喫した



片岡弘紀 (左)・市川梓

[筑波大／日立成・茨城]

平野・鈴木との対戦では、各ゲーム競り合うものの、あと一本が届かずストレートで敗れた



坪井勇磨 (左)・松澤茉里奈

[筑波大／日立成・茨城]

昨年準優勝の松平・若宮（協和発酵キリン・日本生命）に勝利するも、千葉・平にストレート負け

→鈴木が前陣でボールを散らしてチャンスメイクし、平野の豪打で得点を重ね、4回戦、準々決勝とストレートで勝利



平野友樹 (右)・鈴木李茄

[協和発酵キリン／専修大・東京]



藤村友也 (左)・楠川愛子

[愛知工業大・愛知]

藤村がコートを広く使ってかき回し、楠川をリードして勝ち上がった。宮本・高橋にも善戦



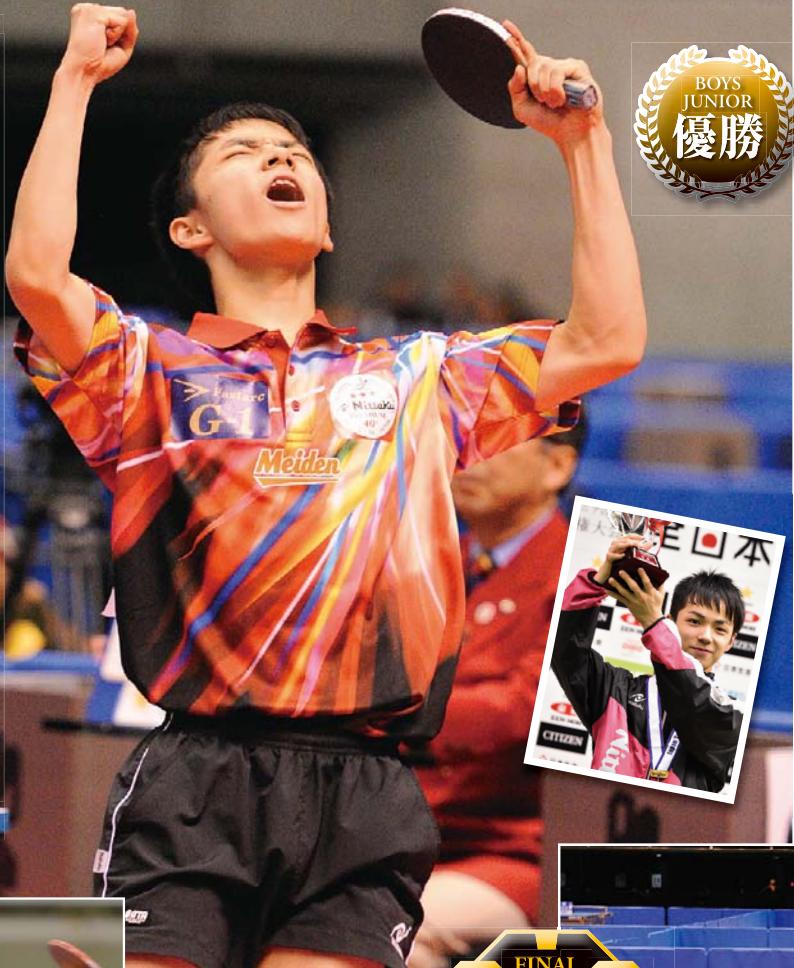
加藤由行 (左)・中畑夏海

[愛知工業大・愛知]

ともに攻撃力が高く、カットの御内・北岡（シチズン・日立成）ペアを押し切ってベスト8入りを決めた

天才・木造、進化のジュニア王者

初のランク入りから頂点へ



木造勇人 [愛工大名電高①・愛知]

「去年は優勝した及川さんにストレートで負けて、“今年こそは”と思っていた」とタイトルへの思いを語った木造。決勝で見せた持ち前のドライブ速攻に加え、打ち合いでの強さ、準決勝の伊丹戦で逆転勝利を呼び込んだ中陣でのしのぎからの逆襲など、より力強いスタイルへの進化を見せて、初のランク入りからジュニアのタイトルをつかんだ。

「準決勝の内容がイマイチだったので、決勝前の練習でしっかり修正したおかげで、決勝は良いプレーができた。目標は東京オリンピックでのメダル獲得です」(木造)



◆速さに加え、よりパワフルなプレーを目指しているという木造。天才はまだまだ進化の過程にいる

JUNIOR BOYS

► ジュニア男子



前陣だけでなく、中陣・
後陣でのプレーにも進境
を見せた今大会の木造



緒方遼太郎 [JOCエリートアカデミー/ 帝京高②・東京]

チキータからの両ハンドドライブを武器に、準決勝で怪物・張本を下した緒方。決勝では JOC エリートアカデミー勢初のジュニア男子のタイトルを狙ったが、最後は木造の粘りに屈した。しかし、堂々の準優勝だ。

決勝後は、清々しい表情で「初戦からずっと接戦で、簡単に勝てた試合はひとつもなかった。やっと終わったという意味でスッキリしました」と語った緒方。期待されながらも、これまでなかなか結果について来なかつたが、ジュニア最後の年に得意のチキータでひとつカラを破り、存在感を見せた。



►コート全面をカバーする緒方のチキータ。球種も多彩で、その完成度はジュニア随一だ

怪物を 沈黙させた チキータの 貴公子





浜本由惟
[JOC エリートアカデミー
大原学園 高②・東京]



↑ クールな試合態度の中にも、優勝に向けた強い意志を感じさせた浜本

ブレないハートで死闘を制す! ユイ、威風堂々 念願のジュニア制覇

タレント揃いのジュニア女子を勝ち抜いたのは、選考会を制し、世界選手権代表に内定していた浜本。4回戦で野村（卓伸クラブ）に大苦戦し、最終ゲーム2-7までリードされるなど、楽な勝ち上がりではなかったが、最後まで崩れないメンタルで混戦を戦い抜いた。決勝の橋本戦は最終ゲームまでもつれ、ジャッジで揉める場面もあったが、最後は強気でカットを打ち抜き、念願のジュニアタイトル獲得となった。

「3年前の決勝でもジャッジで揉めて、そこから負けた経験があるので、その反省を活かして、後悔だけはしないようにと思って戦いました。ジュニアの優勝は世界選手権に向けて自信になりました」（浜本）



決勝は最終ゲームで促進ルールまでもつれたが、浜本は最後まで崩れなかった



JUNIOR GIRLS

► ジュニア女子

昨年ベスト8、昨夏のインターハイでも準優勝と、目覚ましい成長を見せている橋本が準優勝。鉄壁のカットと正確な攻撃で、準決勝では優勝候補筆頭の平野に粘り勝ち、決勝でも浜本と大接戦を演じるなど、実力を存分に見せつけたが、最後に力尽きた。

「浜本さんのはうが経験は豊富なので、向かっていいくだけでしたが、それを跳ね返された。まだ気持ちが足りないんだと実感しました。まずは今年のインターハイで優勝して世界選手権、オリンピックの代表になれるように頑張っていきたいです」（橋本）



橋本帆乃香
[四天王寺高②・大阪]

↓ 準決勝では平野相手に粘り切って、フルゲームの末に決勝進出を決めた



怪物の目には涙 男子初の小学生表彰台も

宇田、出雲といった強敵をラリーで打ち負かして勝ち上がった第1シードの伊丹。木造との準決勝でも、積極的に攻めて2ゲームを連取し、最終ゲームも5-0とリードしたが、そこから悪夢の逆転負けを喫した。「5ゲーム目のチェンジエンドで、戦術に迷いがあって、その後にチャンスボールをミスしてしまい、流れが変わってしまった」(伊丹)。



張本智和
[仙台ジュニアクラブ 小⑥・宮城]

SEMI-FINAL
3 1
11-5
11-9
11-8
0
張本
智和
仙台ジュニア
クラブ

▲リードを奪うも、距離をとって張本の攻めに対応した緒方にストレートで敗れた

史上最年少優勝の期待がかかった張本は緒方に敗れ、準決勝でストップ。小学生での表彰台は男子初の快挙だが、規格外の怪物はそれでは満足しない。敗戦後は涙を流し、並々ならぬ悔しさを感じさせた。試合後の会見で「一般や高校生ともパワーの差は縮められたと思う。来年こそはジュニアで優勝したい」と語った張本。悔しさを糧に、さらなる進化を誓った。

優勝候補大本命の平野は橋本に敗れ、2年連続の3位に終わる。「最初は良かったけど、最後は自信を持ってできるプレーがなかった」と試合後に語ったように、橋本のミスのないカットと攻撃の前に、ややプレーが単調になってしまった。試合後の会見では涙を見せるなど、またも届かなかったジュニアのタイトルに悔しさをにじませた。



バック面の変化系表ソフトを活かした攻守で1回戦から勝ち上がり、優勝候補の加藤(礼武道場/右写真)、早田を下した梅村。準決勝の浜本戦でも積極的に仕掛け、ゲームを先行するなど善戦した。最後は浜本の堅いブロックとループドライブに跳ね返されたが、練習量を感じさせる両ハンド攻守と試合運びのうまさで存在感を見せた。



GIRLS

Best 8



早田ひな
[石田卓球クラブ 中③・福岡]



塙見真希
[ミキハウス JSC 中③・大阪]

昨年度準優勝の早田は準々決勝で敗退。梅村の緩急をつけたボールに搖さぶられ、強打にミスが出た

同学年の平野、早田に負けじとベスト8入り。平野とも真っ向から打ち合い、全中女王の実力を見せた



皆川優香
[昇陽中②・大阪]



山本笙子
[福井商業高②・福井]

橋本にゲームオール9本で惜敗し、「悔しさのほうが大きい」と語ったが、中学2年生でのベスト8入りは見事

威力あるドライブを武器に勝ち上がるも、同タイプの浜本との対戦では、攻守にわたり相手が上手(うわて)だった

BOYS

Best 8



高見真己
[愛工大名電高①・愛知]

龍崎をストレートで下すなど、1ゲームも落とさずに準々決勝へ勝ち上がるも、緒方戦は先手を取れず敗戦



松山祐季
[愛工大名電高②・愛知]

接戦の連続をくぐり抜けて準々決勝進出。ダブルスパートナーでもある木造との同士討ちに惜敗



出雲卓斗
[蓮学館高①・石川]

キレのあるプレーで初のランク入り。伊丹戦では大きなラリーで主導権を奪えずに敗れた



沼村齊弥
[野田学園高①・山口]

安定感抜群の両ハンドで張本とも好ゲームを展開。「勝てるチャンスはあつたし、もう少しやれた」(沼村)

Best 16



小脇瑞恵
[明徳義塾高②・高知]

前陣に張り付いてのバック連打で勝ち上がった



笛尾明日香
[横浜隼人高①・神奈川]

アグレッシブな攻めで平野を追いつめる活躍を見せた



木村香純
[四天王寺高①・大阪]

昨年度3位の実力者だが、好調・皆川に完敗



木村光歩
[山陽女子高①・岡山]

山陽女子の右のエースは橋本のカットを打ち抜けず



龍崎東寅
[EA・帝京高②・東京]

優勝候補のひとりだったが、高見にまさかの完敗



戸上隼輔
[野田学園中②・山口]

急成長を見せる戸上は中ノ瀬(瓊浦高)を下す



田中佑汰
[愛工大附高③・愛知]

中学生離れした完成度の高い両ハンドでベスト16



馬場麻裕
[芦屋学園高②・兵庫]

一般でも安藤(専修大)に勝利するなど活躍を見せた



松田未咲
[絆美高②・愛媛]

フルゲーム2試合を勝ち抜きベスト16へ勝ち上がる



丸冴央奈
[田舎草研中③・京都]

3回戦で杉本(横浜隼人高)をフルゲームで振り切る



枝松亜実
[山陽女子高②・岡山]

浜本と互角に渡り合い、高い実力を見せたが惜敗



弓取眞貴
[希望が丘高②・福岡]

上位進出も予想されたが、沼村にストレートで敗戦



葉波啓
[鶴岡東高②・山形]

浅津(EA)に勝利するも、張本には及ばず



宇田幸矢
[EA中②・東京]

伊丹にはうまく距離を取られ、速攻をかわされた

全日本ジュニア 王者インタビュー

Yuto Kizukuri



——優勝おめでとう。今の気持ちは?

木造 優勝は狙っていたのですごくうれしいです。

でも、一般的のシングルスとダブルスは満足のいく結果にならなかつたので、全体としては悔しいですね。

——では大会を振り返つて、準々決勝は先輩の松山選手(愛工大名電高)との対戦でした。

木造 松山さんは、いつも五分五分でどつちが勝つかはわからない。ダブルスのパートナーでお互いにやることがわかっているし、優勝するためにはここが一番のヤマ場だと、大会前から思っていました。しっかりと準備ができたら、相手のクセを見抜いてプレーができました。

——続く準決勝、伊丹(野田学園高)戦は序盤で0-2と劣勢になつた。

木造 ジュニアの準決勝の前に、一般的のシングルスで負けて、ダブルスも一発負け。その後の試合だったので、悔しくて落ち込んで、頭が真っ白で、気持ちを切り替えようとしたけどうまくできませんでした。序盤は消極的になつてしまつたし、ミスが多くて、2ゲームを連取されました。0-2になつてからは、まずは凡ミスをなくそうと思って、それで追いつきました。

——しかし最終ゲームも0-5と大ビンチ。

木造 あの時は少し諦めてしまいそうになりましたが、チームメイトや愛工大の先輩などOB

の方々がたくさん応援してくれて、「情けない試合はしたくない。最後まで全力でプレーしよう」という気持ちになつて、すごく力になりました。

——そして決勝は緒方選手(EA/帝京)。

木造 準決勝後にすぐに練習場に行つて、技術の修正、チェックをしたのが良くて、それが決勝のスタートダッシュにつながりました。緒方さんは

——昨年のジュニアでも対戦していて、その時はフルゲームで負けで、そこからなかなか勝てず、相性は良くない。でも、昨年9月の世界ジュニア選考会で久々に勝てたし、緒方さんのチキータや逆横サービスの攻略のイメージはできていたので、うまくいきました。

——第4ゲームは、7-10からの逆転で優勝を決めた。

木造 3ゲーム目を落として、4ゲーム目も相手にリードされた時に、昨年のインターハイのシングルス決勝で、三部さん(青森山田高)に逆転された試合が頭をよぎつたんです。ただ「また同じことは絶対にしたくない」という気持ちがあつて、インターハイの時は勝ちを意識して消極的になつたので、今回は最後まで向かつていこうと。

後悔したくなかったので、攻めのプレーを貫いたのが良かったです。

——勝った瞬間の気持ちは?

木造 ホッとしたという感じですね。去年はベスト16で、「来年こそは」と、ずっと優勝を目指してやつてきました。この1年間は普段生活している

木造勇人

【愛工大名電高】

1999年10月22日生まれ、愛知県出身。左シェーク裏裏ドライブ型。センス溢れる両ハンドで幼少期から活躍し、全日本カブ・カデット(13歳以下)、全中男子シングルスなどの全国タイトルを獲得。昨年のインターハイでは1年生ながらシングルス準優勝、ダブルス優勝。今年の全日本ジュニアで初優勝を果たした。

群雄割拠のジュニア男子を制したのは、高校1年の木造勇人。インターハイのシングルス決勝で痛恨の逆転負けを喫した木

時から、ジュニアで優勝する気持ちが誰よりも強かつたと思うし、それが結果につながつたと感じています。

——小学生時代から「天才左腕」として注目されただけど、同じサウスポーの水谷選手や丹羽選手と自分を比較して、どうだろう?

木造 全然まだまだですね。水谷さん、丹羽さんは遠いです。

——何が足りない?

木造 精神面です。ぼくは調子の良い悪いの波があるので、そこが課題だといつも感じています。どんな状況でも自分のプレーを發揮できる選手、結果を残せる選手になりたいです。

——プレースタイル的にはどのように進化していくのだろう?

木造 ナショナルチームの倉嶋監督にも、「もっと大きいプレーもできるように」と言われています。前陣の速いプレーやカウンターは得意ですが、パワーがないので大きいラリーになると打ち負けてしまう。海外で勝つためにも、そこを鍛えていきたいです。

——最後に今年の目標をお願いします。

木造 まずはインターハイ。去年すごく悔しい思いをしたので、絶対に三冠を獲りたいです。1年後の全日本はジュニアで2連覇、そして一般シングルスとダブルスでの上位進出が目標です。ただ実際には、自分はまだまだトップ選手とは差があるので、その差をこの1年でしっかり埋め、成長したプレーを見せたいと思います。



浜本由惟

【JOCエリートアカデミー／大原学園】

中学2年で全日本ジュニアの決勝進出を果たした浜本由惟は、決勝でまさかの逆転負けを喫した。あれから3年。ドイツでの武者修行を経て、大きく成長した彼女は、今年、同じような窮地に立たされながらも、見事な優勝を果たした。

● 1998年7月28日生まれ、大阪府出身。右シェーク裏ドライブ型。全日本バービー、ホーブス、カデット（13歳以下）優勝。昨年9月からドイツ・ブンデスリーガに参戦し、ベルリン・イーストサイドの一員としてプレー。昨年12月の世界選手権女子選手権で優勝し、初の日本代表に選出された

改めて卓球が楽しいって思えるようになりました

※3年前の全日本ジュニアの部で、当時、中学2年の浜本は決勝に進出。第4ゲーム12-11のチャンピオンシップポイントの場面で、浜本の放ったスマッシュを相手の松平志穂（四天王寺高）がブロック。きわどい返球は「エッジ」判定となり、第4ゲームを落とすと、フルゲームで敗れた

Yui Hamamoto

——優勝おめでとう。ハラハラの決勝でしたね。
浜本 ありがとうございます。ジュニアは最後のチャンスだったので、今回優勝できて本当にうれしかったです。

——決勝は、4ゲーム目でマッチポイントを握ったのに逆転を許した。

浜本 10-9でリードしていて、「やつとこの瞬間が来たんだ」と思つてしまつて、決めにいきすぎてしましました。3年前とまったく同じで、ジュースで4ゲーム目を落としました。

——落とした時、3年前のことを思い出した?

浜本 むしろ、決勝に入る時からずっと考えていました。今回は4ゲーム目はジュースにならないよう気をつけようと思っていたんですけど……。まったく同じパターンで、苦しかったです。

——最終ゲームは?
浜本 体力的にも精神的にも疲れていて、とにかく1球ずつやろうという気持ちでした。

——そして7-6で相手のきわどい返球が、またも相手のエッジ判定に。
浜本 「やつぱり」って思いました。やつぱりこういうことが起きるんだ、と。

——3年前はエッジの判定から崩れてしまった。
浜本 判定だから仕方ないですが、苦しかったですね。ただ、3年前は審判に一切抗議をしなくて、それをずっと後悔していたので、今回はちゃんと

——改めて卓球が楽しいって思えるようになりました

抗議しようと。覆らなかつたけど、自分を納得させるキッカケになりました。だから、次のボールを真剣に考えようと切り替えました。

——しかし、次のボールでドライブを空振り。
浜本 「私、意外にも引きずっているんだ」と思いました。引きずらないと決めて台に入つたのに、やつぱり引きずっているんだと。でもその時に、切り離すのは難しいから、引きずっている気持ちも含めて、やろうと思えたんです。

——そこから立て直して、優勝を果たした。
浜本 本当にうれしかった。試合前は泣かないつて決めていたのに、結局泣いてしまいましたね（笑）。

——昨秋からドイツのブンデスリーガに参戦し、昨年末の世界選手権選考会で優勝。ドイツに行つて、何か変わったのだろうか?
浜本 やはりメンタルが強くなつたとは思いますが。日本だと団体戦で戦うことが少ないけど、ドイツでたくさん出場して、それが成長につながっている感じはあります。

——ドイツでの生活は苦労している?
浜本 チームメイトがすごく優しくて、楽しいです。苦労は……特にしていないです（笑）。ドイツに行つたおかげで、改めて卓球が楽しいって思えるようになりました。ずっと私は、卓球は苦しいものだと思っていて、練習も試合も苦しいし、負けたらもつと苦しい。でも、優勝することだけが喜びじゃないって考えられるようになりました。そして、私は卓球が好きなんだなって。

——まわりのトップ選手から学ぶことが多い?
浜本 そうですね。特にチームメイトのパートナー（ハンガリー）はずっと憧れていた選手なので、一緒にプレーできて本当にうれしいです。彼女から学んだことは、心の余裕です。選手たちはすごく一生懸命やつていてけど、「卓球がすべてではない」というスタンスで、プライベートも楽しんでいます。以前の私は本当に卓球だけで、卓球がダメだと私生活も全部ダメになつていて、だからいつも苦しかった。ドイツに行つて、卓球に対する価値観は、少し変わつたような気がします。

——その心の余裕が、試合でのメンタルの強さにつながつたんですね。
浜本 そういう面はあると思います。昔よりも遠くから、一歩下がつて、冷静に自分を見られるようになりました。決勝の最終ゲームで崩れず戦えたのも、それが理由だと思います。

——ドイツに行つて正解でしたね。
浜本 そうですね。でももちろん、結果が出た理由はドイツに行つたことだけではありません。今まで支えてくれた方々とか、ベンチでアドバイスをくれた劉潔さんもですし、そういうまわりの助けがあつたからだと思います。

——そしてついに世界選手権に出ます。
浜本 出られることは本当にうれしいですね。少しでもチームの力になれるように頑張りたいし、中国を倒して金メダルを取るのが目標です。ただ気負いすぎず、「いつもどおり」という気持ちで臨みたいと思います。



水

谷隼と石川佳純。ふたりの現チャンピオンが3連覇を飾り、優勝回数を伸ばした今年の全日本選手権。両選手とも2ゲーム以上落とした試合はなく、圧巻の強さで頂点に立った。

ふたりの試合で、印象に残るのはゲーム間のベンチでの態度だ。邱建新コーチの眼を見据え、アドバイスの一言一句を聞き漏らすまいとする水谷。時に陳莉莉コーチに両肩を抱かれながら、正面で向かい合う石川。共通するのは、コーチとの強い信頼関係。コーチのアドバイスを「話半分」で聞き流したり、チームメイトや後輩にベンチに入つてもう選手も多い中で、ふたりのチャンピオンのベンチでは、プロフェッショナルとプロフェッショナルが対峙する。

平成22年度大会で吉村真晴、23年度大会で丹羽孝希に決勝で敗れた水谷は、懸命にもがく中で邱建新コーチと契約を結び、

鮮やかに王座に返り咲いた。同じく22・23年度大会決勝で敗れた石川は、陳莉莉コーチとタッグを組み、着実に攻撃力を強化してきた。

ここ5年間の全日本選手権で、両選手がたどつてきた道のりは非常によく似ている。名選手のそばに、名コーチあり。

男女シングルス決勝を戦つた4選手、ジュニア男女のチャンピオンのベンチには、いずれも中国人コーチ、

中国の大会では何度も眼にしてきた光景だが、中国人コーチのベンチでの気迫と自信は日本の指導者も見習うべき点がある。まず選手を見つめ

る「眼ヂカラ」が違う。選手がそっぽを向こうものなら、グイッと顔を近づけて熱弁を振るう。

強い信頼関係を感じさせる水谷(右)と邱建新コーチ



コーチとの信頼関係が紡ぐV ミウミマは記者会見でも魅せた

昨年、メーカー間の打球感の違いにより、大きな混乱を引き起こしたプラスチックボールは、今大会は意外なほど問題にならなかつた。

男女の6回戦以降の使用球を見て

みると、女子は準々決勝までは様々なメーカーが混ざるが、準決勝・決勝の3試合は、今大会から使用球に加わつた紅双喜のボールだつた。ワールドツアーや世界選手権、NTC(ナショナルトレーニングセンター)での練習で使用されるため、代表選手にとつては最も馴染み深いボールと言える。一方、男子は6回戦以降の15試合のうち、実に14試合をバタフライのボールが占めた。バタフライの契約選手や契約チームの多さによるものだ。

女子優勝の石川は「今はどのメー

今大会は観客動員が近年では最多。リオ五輪イヤーとあつて、報道陣の数も非常に多かつた。60人以上は座れる記者会見場で「立ち見」が続出したくらいだ。会見場での選手のコメントは、プレースタイルと同様に個性がある。小学6年生の「怪物くん」張本智和の会見からは、眞面目さと緊張感が伝わってきた。ノリの良い吉村真晴は「どんどん質問くださいよ!」という感じで、質問の数が少ないとちよつと寂しそうだ。

「名選手のそばに名コーチあり」と前述したが、多くの名選手を生む言葉力もまた、名選手の条件のひとつ。彼らの言葉は多くのメディアで流れ、人々の注目を集め、その競技のステータスを高める。

今大会、大いに注目を集めた平野美宇と伊藤美誠、「ミウミマ」の言葉力は、対照的でなかなか興味深い。伊藤はサービス精神旺盛。どんな質問にも笑顔で丁寧に対応し、技術的解説も細かいので、卓球にあまり詳くない記者にはありがたい存在。世界戦のミックスゾーンなどは、時に「ミマちゃん卓球教室」の趣すらある。

一方、平野はゆつたりした口調から、強気なコメントや、思ぬ迷言が飛び出す。伊藤に「中国選手のようないいプレーだった」と評された際の、「えーつ、美宇、中国人なんだ、うれしい!と思つた」という唐突なコメントは、なんだ、うれしい!と思つた」という唐突なコメントは、報道陣の爆笑を誘つた。

野球にたとえるなら、会見での伊藤はキツチリ当てるアベレージヒッター、平野はホームランバッターという感じか。女子卓球界の未来を背負う、ふたりの言葉力にこれからも注目したい。

全日本 俯瞰の眼

チャンピオンふたりが
他寄せつけない強さを見せた
ラボール2年目の全日本。
フロアを駆けめぐり回り、
様々な話題を集めました!

文=柳澤太朗
text by Taro Yanagisawa



美宇ちゃんの会見は、
どんな言葉が飛び出すかわからない?

カーボールでも問題なく対応できる」と語る。それでも、大会前に様々なメーカーのボールを使つてラボール対策を積むのは、選手にも負担が大きい。やはり統一球での開催が望ましい。

2016.1 全日本フラッシュ! ALL JAPAN FLASH!!

1月11日からの7日間、延べ1,621人の選手が出場し、
25,300人が観戦に訪れた全日本。オリンピックイヤー
の今年も数多くのドラマが展開されたが、その中から、
特に注目された出来事をピックアップ!



どうした!? ミウミマ まさかの 初戦敗退!!

女子ダブルス2回戦

栗村郁未・栗屋美佳 11, -4, 12, 3 平野美宇・伊藤美誠
(龍谷大学学友会体育局卓球部) (JOCエリートアカデミー・スターツSC)



2ゲーム目は面白いように連続攻撃が決まり、3ゲーム目もリードしていたのだが……

ワールドツアーでの優勝をはじめ、世界でも屈指の実力を誇る平野・伊藤のミウミマペアが初戦で敗退。大会2日目の会場はどよめいた。全日本では小学6年からペアを組んで出場しているふたりは、思いもよらぬ初戦敗退に悔しさを感じました。

栗村・栗屋(龍谷大)との試合は、1ゲーム目は逆転され落としたものの、2ゲーム目は4本で簡単に奪い、3ゲーム目もリード。このまま突き進むかと思われたが、またもや逆転され、4ゲーム目は龍谷大ペアのミスのないラリーと粘りに屈し万事休す。「日本選手のボールに最後まで合わなかった」(伊藤)。「1ゲーム目の逆転が響きました。国内でも勝てるペアになっていかないといけない」(平野)。しかし、気持ちを切り替え、この敗戦を勝利への糧に変えたふたり。女子シングルスではともに最終日まで勝ち進み、ふたり揃って表彰台へと上がった。



栗村(右)・栗屋はミスなく粘り切り、金星を挙げた



敗戦直後の記者会見では、さすがに落胆の色を隠せなかった平野(左)・伊藤

さらにパワーアップ! 小学生・張本&木原の活躍



小6張本、ジュニア3位!!
一般でも4回戦進出

張本智和
(仙台ジュニアクラブ)



シングルス4回戦、リオ五輪内定の丹羽孝希(明治大)の胸を借りた張本。集中力の高いプレーを見せた丹羽の前には完敗だった。試合後、張本の健闘を称えるかのような丹羽の仕草が印象的だった(右)

張本智和の全日本



●ジュニア男子シングルス 3位入賞

3回戦	5, 10, 4	松田真哉(長田高)
4回戦	5, 5, 7	橋本啓(富田高)
5回戦	9, 7, 7	葉波啓(鶴岡東高)
準々決勝	3, -9, 8, 8	沼村齊弥(野田学園高)
準決勝	-5, -9, -8	緒方遼太郎(EA/帝京)

●男子シングルス ベスト64

2回戦	5, 7, 4	鈴木誠(サボテンクラブ)
3回戦	7, 6, 8	吉田海斗(希望ヶ丘高)
4回戦	-1, -7, -6, -9	丹羽孝希(明治大)

●男子ダブルス ペア: 浅利良維(蒲町中)

2回戦	-7, -6, -4	花木誠弥/祖父江亮佑(埼玉工業大)
-----	------------	-------------------

※EA=JOCエリートアカデミー



身長もグンと伸びた張本。ベンチの父・宇さんと背も並ぶ

大 会前から注目を集めていた超小学生級プレーヤーの張本智和と木原美悠。堂々としたプレーで一般シングルスで勝利を上げ、多くのメディアに紹介された。

卓球界の「怪物くん」と張本。初の小学生優勝を狙ったジュニアでは、強豪高校生を連破し3位に入賞するも、悔しさをにじませた。一般シングルスは2・3回戦をストレートで勝利。4回戦での丹羽孝希(明治大)には力の差を見せつけられたが、男子史上最年少での4回戦進出を遂げた。

一方の11歳・木原も2勝を挙げる活躍。多くのカメラに囲まれても緊張皆無、メンタル面でも大物の片鱗を見せた。

木原美悠
(ALL STAR)

小5の木原
一般で2勝!



「あせる場面でも自分のプレーができます」と記者会見でも堂々答えた強心臓の木原。サービスとフォアのカウンタードライブがさらに磨かれた11歳は、2回戦ではカットマンの藤田を下し「カットマンとの試合は面白いし好きです」とニッコリ。3回戦では今年度全日学3位の小道野にラリー戦に持ち込まれて勝利はならなかったが、ブロックやサービスが光った

木原美悠の全日本

●女子シングルス

1回戦	6, 6, 8	滑川明佳(東京富士大)
2回戦	-7, 8, -8, 6, 5	藤田有香子(広島日野自動車)
3回戦	-7, -8, 6, -2	小道野結(早稲田大)

※ジュニアの部には不出場



ジュニアの部には張本を含め小学生は5名出場。ジュニアで最年少となったのは、大藤(おおとう)沙月(フェニックス卓球クラブ)。小学5年の有望株は、1回戦で高校生を破り2回戦に進出した



ジュニア最年少 大藤、伸び伸びプレー

魅せた速攻
山梨有理、
最後の全日本



10年ジャパンオープン複優勝、11年世界戦日本代表の山梨有理(ミズノスポーツサービス)は、最後の全日本のベンチに母(上写真右)を迎えて、鋭い両ハンド速攻で5回戦まで勝ち上がった。「今は練習場所がなく、この2年間は卓球は楽しいけれどしつらかった。最後(の試合)が後輩(松澤茉里奈)で良かったです」(山梨)

大栗&山本が、
3年連続の
大会最年長



大会最年長は、男女ともに3年連続で大栗寛(48歳/徳島銀行・右写真左)と山本真理(38歳/オーケワ)とともに若手選手に劣らない若々しいプレーを見せた



女子シングルス2回戦、姉の皆川愛華（上写真右／山陽女子高）と妹の優香（昇陽中）の姉妹対決が実現。結果は妹が3-2で勝利となった。ふたりの試合をベンチで見守った父の顕一さん（元全日学複優勝）は、「一番近いところでふたりを観たかった。勝負をつけるのはかわいそうでしたが……親としては最高の時間でした。お互いに良いプレーでした」と涙でコメント



姉妹・兄弟のダブルスペアもチラホラ。左は小野詩織（手前）・瑞歩の姉妹ペア（東筑紫短大）、右は内村秀平（右）・英司の兄弟ペア（都城商業高）



男子ダブルス2回戦、町田幸希（上写真左）・町口智哉（國學院大）が、元社会人優勝ペアの水野裕哉・大矢英俊（東京アート）を撃破。町田の変化サービスが相手を翻弄（ほんろう）した

美しい青と赤

スポットライトで浮かび上がる卓球台とブルーのライティングの美しいコントラスト。最終日の決勝前、全日本の歴史の朗読+バイオリンの調べが会場をつつんだ



長官も観察に

2020年を見据え昨年10月に発足したスポーツ庁。初代長官の鈴木大地氏（中央）が、男女ジュニア決勝などを観戦した

卓球台は五輪使用色「レジュブルー」に

今年度の全日本では、リオ五輪で使用されるのと同じ「レジュブルー」カラーの卓球台が採用。今までよりも少しグリーンな色味です



チャンピオンには豪華な副賞が!!

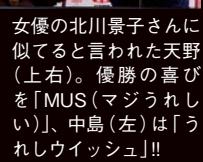


各種目優勝者に贈られる豪華な副賞の数々。全国農業協同組合連合会よりお米、岩手牛、たまご、国産若鶏加工品が、シチズン時計より高級腕時計が、そして日清オイリオより食用油1年分が贈られた

来場者は延べ2万5千人 土日は大入り大盛況!



MUS



女優の北川景子さんに似てると言われた天野（上右）。優勝の喜びを「MUS（マジうれしい）」、中島（左）は「うれしウイッシュ」!!



貧血検査も!!
スポーツ医・科学委員会のブースでは、相談のほか、貧血検査も行っていた



愛ちゃんと記念撮影だ!!
日清オイリオのブースには、愛ちゃんと一緒に撮れる顔出しパネルが設置



売店で目指せ一等賞!! ガラポン&ガシャが大人気

それぞれに趣向を凝らした売店＆PRブースには、試合の合間はお客様が寄せ大混雑。全日本限定グッズのほか、「ガラポン」「ガシャポン」などの「くじ」も大人気でした



優勝直後 水谷隼連写



JUN MIZUTANI

THE CHAMPION'S INTERVIEW 1
CHAMP 2016

水谷隼
beacon·LAB

「チャンピオンインタビュー」

「ぼくを脅かすやつが出てくれたほうがうれしい。
こいつに勝ちたいという新たなモチベーションになるから」

終わってみれば今年も「水谷劇場」だった。
2ゲーム以上失った試合はない。
最終日前日の会見で「明日は世界6位の試合を見せますよ」と豪語した。
準決勝、決勝は完勝と言える内容だった。
斎藤清、小山ちれに並ぶ史上最多タイ8度目の優勝。
「負けると思っていた」「怖いんですよ」とも本音。
圧倒的な強さを誇る王者が本誌だけに漏らす本音。

聞き手=今野昇(本誌編集長)

interview by Noboru Konno

写真=江藤義典&奈良武
photographs by Yoshinori Eto & Takeshi Nara

今日は本当にやばいと思いました。
内心、不安でした。

1年前に苦戦した笠原弘光（協和発酵キリン）を準決勝で完封し、決勝では張一博（東京アート）の心理を完全に読み切り、完勝。優勝を決めた直後に床に倒れ込み、喜びを表現した水谷隼。その時点での彼の本心と周りの見る眼とのギャップがまずあった。

優勝して当たり前と思われているチャンピオンは、何かの重みに耐えていたのか、それともあれは喜びのパフォーマンスだったのか。

優勝した時には彼と必ず行く新宿の高層ビルの19階のカフェ。優勝を決めた2日後にインタビューを行った。

——優勝おめでとうございます。10年連続決勝進出で、8度目の優勝達成です。

水谷 8回という数字は初優勝した時から意識してました。

——プレッシャーはあつたのかな。

水谷 ありますよ、もちろん。今回が一番難しいと思つてました。

——毎回そういうことを言つてているような気がするね。

水谷 そういう気分、素直な気持ちがそこなんですよ。今回は本当にやばいと思いました。内心、不安でした。ひとつは用具。最終的に試合で使うラバーの硬さが決まっていなかった。年末年始はタマスも休みだから、大会前に調整するラバーがなかつたんです。『テナジー80』

を貼つてますけど、その中での硬さが決まっていなかつた。ずっと硬めのやつでやつてたけど、硬すぎてしつくりいつてなくて、軟らかいものにしたかった。でも手元に軟らかいのは1枚しかなくて、ずっとそれを使つてたけど、それも軟らかすぎて、本当はその中間のものが良かつたんですよね。

1月7日にタマスの工場に行つて、ラバーを硬めのやつと軟らかめのやつを選んで、ロシアリーグでラケットが破損しましたので、その修理をお願いしました。

それに1月4日の練習で腰を傷めたんです。腰が痛くて、9日の午後から12日午後まで練習ができなかつた。

ラバーは12日の午後には軟らかいものを使つてたけど、13日夜に硬めのものに替えた。そのラバー1枚で14日からの大会を乗り切ろうとした。本当はある程度、使いこなしたもののがいいけど、15日の試合が終わつた時点で表面が擦れていた。それでも、このラバーで残りの2日間を乗り切ろうとしたけど、無理でした。16日の時にはラバーが消耗しすぎてこれではだめだと思った。過去の全日本で最終日にラバーを替えたことは1回もなかつたのに、今回は替えた。

——腰のほうはどうだつたんだろう。

水谷 痛みはずつとありました。最後のほうは痛み止めの薬を飲んでました。やっぱり年取つてくるんですよ。いろんなところが痛くなる（笑）。

——大会前には組み合わせを見て、いろいろ考へるのかな？ 正直誰が来る

水谷 もちろん考えますよ。こいつと当たりたくないから負けてほしいなど思ひますから。反対側は、案外、森園（政崇・明治大）が来るかなと思つてました。それに来ないかもしれないけど、丹羽（孝希・明治大）がダークホースかなと。反対側は誰が来てもあまり変わらないけど、自分のブロックで嫌だつたのは吉田（雅己・愛知工業大）と大島（祐哉・早稲田大）ですね。今の自分だと厳しいかなと思つてました。その二人が負けてくれたので、これは優勝できるかなと思いました。

——大会全体を振り返ると、どうですか？

水谷 15日（金曜日）が試合が多くてしんどかったです。ダブルスとシングルスが交互にあつたから身体がメチャクチャきつかったです。点数を見れば、ほとんど4-0か4-1ですけど、感覚としては相当んどいし、自分のプレーの出来は悪かつた。決勝（張戦）はまあまあ良かつたけど、それ以外は何でこれで勝てるんだろうという試合ばかりだった。ゲームの中で8-4とかでリードしていて、そこから10-10になつて、負けそうになつたゲームが4回か5回あつた。

準々決勝の酒井（明日翔・明治大）との試合でも1ゲーム目、8-2から10-11になつたりとか、次のゲームも8-4からジユースになつて。準決勝の笠原の時にも10-7からジユースになつたりする。自信がなかつたですね。

——準決勝で笠原選手と対戦。1年前、

れた相手との対戦だつた。

水谷 去年は笠原がどうこうじゃなくて、ボールが合わないとぼくも相當言つた。今回は彼もタマスのボールを選んだから、これは負けられない。去年は競つた理由がボールだつたけど、自分は正しいことを言つたんだということを証明したがつた。

——今日はチキータを多用して、彼も戸惑つていたし、自分がサービスの時に相手にチキータをさせない縦回転系のサービスも効いていた。

水谷 彼はサービスがうまいので、フォアハンドでレシーブをしていくと甘いところに飛んでいつて攻められてしまうと思つたので、打たれてもいいからチキータで行こうと思った。それで1ゲーム目にそれを使つたら案外効いた。自分がやりたいチキータでなくとも、入れていてやつてやつていいこうと思つた。

——笠原選手は試合後に、水谷選手のチキータが他の選手と違つて返しにくかつたとコメントしてました。

水谷 2ゲーム目からは意識していろいろな種類のチキータを出しました。他の選手なら粗われるようなチキータでも彼は嫌がつてたので、チキータするようなボールでないのに無理矢理チキータしたりとか、ミスしてもいいから見せ球のようなチキータをして、徹底的に相手の嫌がることをしました。あのチキータに

対応されたら苦しかつたかもしれないですね。

——笠原戦が終わつて、ひとつヤマを

越えた感じはあつたでしょ。
水谷 思つたよりは簡単にいきすぎた。
もつと競つてもおかしくなかつた。

ゲームを落としてから 追い上げる展開を最近経験して ないから、嫌な展開だつた。 決勝は最悪なパターンだつた

——決勝に上がってきたのは張一博選手だつた。

水谷 意外でしたね。吉村（真晴・愛知工業大）が来ると思ってました。決勝で（張と）やるのは5年ぶりくらいで、全日本で対戦するのは4回目くらいかな。一博さんは（準決勝での）吉村には厳しいと思っていた。ぼくは最近は左（利き）に自信があつたので、一博さんが決勝に来たほうがあれしい。練習会場にモニターがあつたので二人の試合は見てました。吉村も調子が良くなくて、得意のサービスも台から出て一博さんに先に攻められていた。一博さんはいつもどおりで堅いブロックとフォアのカウンターが決まつていた。

——決勝戦を振り返るとどうですか？

水谷 1ゲーム目、4-0、5-1、6-4

とリードしていたのに、落とした。一博

さんは久しぶりの試合だけど、1ゲー

ム目は取りたかった。1ゲーム目を取つて、そこから一気に行きたかった。全日

本で1ゲーム目を取られるのは3年ぶりくらいかな（編集部注：平成24年度決勝の丹羽戦以来）。やはり1ゲーム目を取られると試合のやり方が変わつてくる。落としてから追い上げる展開を最近

経験してないから、嫌な展開だつた。決勝は最悪なパターンだつた。それにはコートの上の照明が嫌でした。最終日に出る選手は前の日に照明を一度チェックしているんですよ。だから去年とは違うけど、やはり見づらかつた。「後ろのLED広告ももっと暗くしてください」とお願いしたけど、これが限界だと言われました。LEDは大嫌いです。ITTF（国際卓球連盟）の試合でもそうだけど、本当にボールが見えない。

特にメディアシートの反対側に行つた時のフォアサイドが見えない。終わつてから映像を見直したけど、フォアはまともにボールに当たっていない。バックサイドだと見えるけどフォアは見えないまま打つている。

——1ゲーム目を落として、2ゲーム目は？

水谷 まずボールが見えないというのが頭にあつた。「どうしよう、どうしよう」と。でも、一博さんも完璧には見えてない、打ちにくそうにしてたから。2ゲーム目はコートエンジで反対側に一博さんが行くから、今度は彼のフォアを攻めていこうと思いました。

——試合前に立てた戦術は？

水谷 サービスを持っている時にはフォア前からですね。フォア前に逆回転と順回転の横回転を出していいって、あと

考えるけど、それまではチキータを多めに相手のバックに集めて、それを相手は自分のバックへ返してくるから、バック

対バックの勝負に持ち込むか、そのボ

ルをフォアで攻めていく。ストップする

時には、ストップを少し切つた。相手は

ダブルストップしてくるだろうし、それ



優勝を決めてベンチの邱建新コーチとがっちりと握手

——ただ、丹羽戦、吉村戦の張選手を見ても、バックブロックの強さ、フォアのカウンターの調子が良かつた。

水谷 バック対バックではぼくも負けないという自信はあつた。でも相手は今まで以上にコースを散らしてきた。2本同じコースで来ることがなくて、バック、ミドル、フォアとか1本ごとにコースを散らしてくるのがうまかつたから、なかなか強打できなかつた。

——いけると思ったのはどの辺だろう。

のバックにフリックをしてくるだろうから、それを使つて相手を惑わしていこうという転を混ぜて相手を惑わしていこうというのが作戦。

レシーブではチキータとストップを両方使う。相手が回り込むようになつたら考えるけど、それまではチキータを多めに相手のバックに集めて、それを相手は自分のバックへ返してくるから、バック対バックの勝負に持ち込むか、そのボルをフォアで攻めていく。ストップする時には、ストップを少し切つた。相手はダブルストップしてくるだろうし、それ

のバックにフリックをしてくるだろうから、それを使つて相手を惑わしていこうという転を混ぜて相手を惑わしていこうというのが作戦。

レシーブではチキータとストップを両方使う。相手が回り込むようになつたら考えるけど、それまではチキータを多めに相手のバックに集めて、それを相手は自分のバックへ返してくるから、バック対バックの勝負に持ち込むか、そのボルをフォアで攻めていく。ストップする時には、ストップを少し切つた。相手はダブルストップしてくるだろうし、それ

が甘くなつたり台から出でてくるから、それを狙つていく。あとは時々下回転を混ぜて相手を惑わしていこうというのが作戦。

——ただ、丹羽戦、吉村戦の張選手を見ても、バックブロックの強さ、フォアのカウンターの調子が良かつた。

水谷 バック対バックではぼくも負けないという自信はあつた。でも相手は今まで以上にコースを散らしてきた。2本同じコースで来ることがなくて、バック、ミドル、フォアとか1本ごとにコースを散らしてくるのがうまかつたから、なかなか強打できなかつた。

水谷 4ゲーム目ですね。4-6でリードさせていたけど、そこで一博さんがサービスミスして5-6、あのサービスミスで一気に流れが変わりましたね。あのゲームを取られていたら危なかった。

そのゲーム、10-6でチャンスボールを打つたらバックブロックされて、10-7になつたところで、ぼくがタイムアウトを取りました。大体自分でタイムアウトを取つた。今大会は早めに取つていった。3-1とかゲームをリードした時の10-5でタイムアウトを取るとか、今は早くから、一瞬自分の気がゆるむ時があるから、迷つたらすぐに取るようにしました。

5ゲーム目は2本くらい差がついたら優勝が見えてきましたね。相手も、もうダメかなというように見えただけ、自分も苦しかつたし、優勝を決めるまでの1本1本が重かったです。

——去年、そして今年の君のプレーを見ると、ロビングの回数が減つている。攻め込まれても何とか中陣のファッショナのいいで、そこから前に距離を詰めていつてカウンターを狙うという積極性が見えました。

水谷 今はロビングに自信がないんですよ。練習もしていないし、点数を取れる気がしない。それならカウンターを狙つたほうが点数を取れる。ロビングをしたい時でも今は入らない。やつていないし、ラバーを替えて感覚もわからないし、点数が取れないからやらないんです。

——でもまわりは「水谷はプレースタイルをアグレッシブに変えている」と評し

「うれしいし、奇跡だと思つた。決勝だけは自信はあつたけど、大会前はまさか優勝できると思つていなかつたから」

水谷 ている(笑)。

水谷 それは違うんですよ(笑)。でき

——優勝した瞬間の気持ちは? 床に倒れ込むほど喜びようだったけど。

水谷 必死ですよ。うれしいし、奇跡だと思った。決勝だけは自信はあつたけど、大会前はまさか優勝できると思つていなかつたから。

——8回も優勝しても、前の優勝は覚えているのかな。

水谷 忘れますね、前の優勝を。優勝の記憶が上書きされていくんですよ。

——その中でも、どの優勝が記憶の中にあるんだろう。

水谷 8回全部が苦しかつた。5連覇した時が一番余裕があつたかもしれない。

あの時の決勝は一博さんが相手で4-10で、それ以外の試合もほとんど競つていないし、勝つ自信もあつた。連覇が2年間途切れた後、2年前の6回目の優勝は組み合わせに恵まれたし、去年はその分一気に相手が強くなつた。森薗、吉村(真晴)、岸川さんという対戦だった。今年は去年より組み合わせはしんどくないかも知れぬけどきつかったですね。

——8回優勝はすごい記録だけど、10年連続決勝進出もすごい。

水谷 ぼくは5歳で卓球を始めたので、

卓球歴は21年なんんですけど、そのうちの半分は全日本で決勝に行つてている(笑)。

——化け物みたいな記録だな(笑)。

普段の食生活とか身体のケアの仕方でも差を感じますね。

——君も最初からそういう意識ではなく、だんだん変わつていったんだよね。

水谷 もちろんロシアに行ってから意識は変わりました。

——中堅、若手が早く自分のところまで来てほしいという思いはあるんだろうか?

水谷 ありますよ。ぼくが22、23歳頃にはプロツアーで何大会かは優勝していたし、世界ランキンギングのトップクラスの人にも相当勝つてましたから。

——世界ランキンギングの一桁と二桁の選手は違うんだろうか。

インタビューの翌日、水谷はロシアに旅立つた。そしてヨーロッパチャンピオンズリーグに出場したものの、体調不良で翌週のドイツオープンを棄権した。優勝の余韻に浸ることなく、全日本選手権の疲労が彼を襲つたのだろう。

——全日本は終わつてみれば「水谷劇場」だつたけど、自分を追いかけてくる若手が育つていない感じがあるのかな。

水谷 数年前と比べれば日本の男子レベルは上がつてているけれども、まだ若手はすべてに甘いですね。

——彼らも練習しているはずだけど、何が違うんだろう。

水谷 心技体、全部ですね。特に気持ちの部分は全然違うんじゃないですか。

——気持ちというのは試合の中での執念とか……。

水谷 執念もそうだし、試合に向けての気持ち。合宿で一緒にいても感じるし、

か、執念を持つています。

——若手がそこまで伸びてこないのであれば、8回優勝してても、まだ行けるという感じでしょ?

水谷 今の実力がキープできれば10回くらいは優勝できます。ただキープできるかどうかは自分でもわからない。年齢とともにこれからパフォーマンスも低下していくと思うから、頑張つて、少しでも向上していきたい。

——10年前の初優勝の時よりも周りのレベルは今のほうが高いはずなのに、他の日本のトップ選手と何が違うんだろうか。その原動力は何だろう?

背負っているものは全然違いますよ。初優勝してからは周りが勝手に評価する。若くして優勝したから天才扱いするじゃないですか。それが知らぬいうちにプレッシャーになっていく。初優勝の時に「8回優勝したい」と言ったら、「おまえアホか」と言われた。その頃から、いろいろな人からその人の目線でいろいろ

ろ言われる。100人いたら違うことを100個言われる。

——それを気にするの？

水谷 気にしますよ。だって卓球王国はこのタイミング（優勝する前）で本（書籍）出すとか、表紙（1月発売号）にするとか言わないですか。内心「アホか」と思うでしょ（笑）。

——ごめんね。アホなタイミングだった（笑）。

水谷 知り合いから大会初日のメールで「最終日、応援に行くから」とかすると、なんでオレが最終日に残るという前提になっているんだよと思う（笑）。そういうのがメチャクチャあるんですよ。スポンサーも「最終日、応援に行きます」

とか（笑）。どれだけ最終日に残るのが大変かわかつてないんだよなと思うんですよ。それが年々エスカレートしていく。勝つのが当たり前だと思われていて、ハードルもこれ以上上がらないところまで上がっている。

——それはしようがないでしょ。君も「全日本は二桁優勝します」とか「オリンピックはメダルを獲ります」と公言しているから、自分でハードルを上げている部分もある（笑）。それで周りも期待する。それも計算しているでしょ？

水谷 それは言わなきやいけないじゃないですか。メディアに言うことと、本心は違うんですよ。時にはメディアがほしめる言葉を言わなきゃいけない。

——じゃ、本心は？

水谷 「（メディアの質問に対し）アホじゃないの！」と思ってます（笑）。勝つのが当たり前と思われるのが苦痛ですね。ただ「頑張ってね」と言われるのがいいんですよ。

本当に今回は勝てないだろうな、あいつ強いし、今の自分じゃ勝てないだろうな、どうやつたら勝つんだろうと思つてました。これが本心です。

——それでも勝つてしまう水谷隼の強さって何だろう。

水谷 それは執念です。自分の持つていの引き出しをフルに使って、摸索した結果です。摸索したうえで覚悟を決めて強気でやるんです。

——そうやって自分の持つている引き出しこそ使うとか、苦しんで勝つとか、「おれはこんな状態だけど勝ったよ」という



水谷隼●みずたに・じゅん

1989年6月9日生まれ。静岡県磐田市出身。全日本選手権のバンビ・カブ・ホープスの各年代で優勝。ドイツ・ブンデスリーガでの卓球修行によってその才能を磨いた。09・13年世界選手権では、岸川聖也と組んだダブルスで銅メダルを獲得。全日本選手権では史上最年少の17歳7カ月で優勝し、平成27年度全日本選手権大会では8度目の優勝を達成。2014年ITTFワールドツアーグランドファイナル優勝、世界ランキング7位（16年2月現在）

自己満足みたいな部分もあるでしょ？

水谷 ありますね。自分は格上だけれども、常に挑戦してますよ。「相手が水谷隼をどう考へているのか」と常に考へるんですよ。（張）一博さんだったらほんとぼくに負けてるし、自分のサービスを嫌がってるだろうな、だから考へるんですよ。（張）一博さんだったらほんとぼくに負けているし、自分のサービスを嫌がることをする。笠原に對してもそうです。手が考へる。ぼくは、その逆をやる。相手はウザイなと思うわけですよ。

自己満足はあるけど、それは勝つためにやつてますよ。笠原とやつていて「どうだ！おれのチキータ取れないだろ」「これ、嫌だろ？」みたいな自己満足はありましたよ（笑）。あいつも「なんだよ、このチキータ？」みたいな顔をしていましたから、「どうだ、いいだろ、このチキータ」と彼を見てました（笑）。1試合試合相手を探りながら相手の嫌がることを徹底してやつて、「すごいだろ」と思わせてます。

ぼくから見ていると石川（佳純）は他の選手とは違う。彼女は入り込んでいくし、異常なまでに勝ちにこだわる執念と信念を持つてます。ぼくは試合は試合、試合じゃなかつたらリラックスしているけど、石川は決勝前にコーチと二人でビデオを観たりして完全に自分の世界に入り込んでいる。ストイックだし、それが彼女のすごいところ。

ぼくは逆に試合前でも普段と同じように時間を過ごすというある種の異常性を

持っている。確かにぼくも人を寄せ付けてに入り込んでいる時期もあった。今は逆に試合前に入り込むのはなく普段どおりリラックスして、試合前の1時間の練習では集中したい。そういう時には、ぼく自身も自分の世界に入っているんですけど。

ぼく自身は卓球においては芯がある、軸がぶれない。「周りには流されない」という自分の信念は崩れない。小さい頃からそれだけは変わらない。

自分の夢でもあるし、家族やファンにとっての夢です

——自分が見た今年の「水谷隼」とは？

水谷 周りから見てどうかはわからないけど、自分としては今年の自分は自信がなかつた。この1年でいろいろな大会で多く負けてるし、モチベーションを高いレベルで維持できなかつた。全日本では自分の150%を出そと努めたけど、ワールドツアーとかは試合を消化していくような気持ちがあります。最近あんまり燃えないと。

——世界5、6位だからほんと格下と対戦し、受けるような気持ちになるからだろうね。

水谷 そういう傾向がちょっとありますね。ツアーデ負けると周りは「世代交代」とか言うかもしれないけど、ぼくはそこで100%の力を出してませんから。「まだまだやれる」と自分に言い聞かせてます。

——君のレベルだと一気に強くなること

はなく、数ミリずつ前に進む感覺かな。

水谷 繼続して良いパフォーマンスができる自信がないです。ベテランになると、ある大きな大会でパッと成績を出すことがありますよ。昔のワルドナーやパーソンがオリンピックのような大舞台で勝つような感じですね。その分、普段のツアーナーなどでは落としている。ツアーナーで150%を出そのは身体が拒否反応を示すし、燃えない。この年齢になつてくると、世界選手権やオリンピックにベストパフォーマンスできるように調整しなければいけない。

——今の年齢で何が大変なんだろう？

——日本で勝ち続けることの意味はそこにあるのかもしれない。

「常に『まだ自分は若いぞ』と 言ひ聞かせているけど、 そこで心が折れたら一気に落ちていく。 それが怖いんですよ」

水谷 怖いんですよ。自分のパフォーマンスが落ちるのが怖いんです。年齢には勝てないじゃないですか。常に「まだ自分は若いぞ」と言い聞かせているけど、

そこで心が折れたら一気に落ちていくのが怖いんですよ。今はまだ言い聞かせるほうが怖いんですよ。今はまだ言い聞かせるほうが勝つていてるけど、いつか結果が出ないとか、練習できないとか、ケガをすることとか、本当にダメかもしれないとかが折れたら本当に終わつっていくと思うんですね。そうなるのが怖い。

しかも、それって人それぞれじゃないですか。年齢というよりも……重ねてきただもの大きさなんですよね。ぼくは中

学2年からドイツに行つて、12年くらいは世界の舞台でやつてますよ。他の人が以上に世界で戦つた時期が長いんですよ。だからこそ、他の人よりもボキッと折れるのが早い気もする。

そういう選手は見ていてわかるんですよ。急に覇気がなくなるし、貪欲さがなくなる。まさに纏つててオーラがなくなるんですよ。そういうのが怖いんですね。だからこそ、「まだまだ自分はやれる、自分は20歳くらいなんだ」と常に言ひ聞かせています。

——日本で勝ち続けることの意味はそ

——だからこそ、ぼくを脅かすやつが出てきてくれたほうがうれしい。こいつに勝ちたいという新たなモチベーションになるから。

最近、自分自身、何気ない凡ミスが増えたと思う。最近特に思うけど、ツツキでミスするとか、ツツキが飛んできてしまつたら本当に終わつていくと思うんですね。そうなるのが怖い。

——君のレベルだと一気に強くなること

くなると、自分の年齢をそこに重ねてしまふんですよ。年だからパフォーマンスが落ちた、年だからああいうミスをするんだと考えてしまう。

以前、吉田（海偉）さんを見てすごく思つたんですよ。吉田さんが30歳くらいのないボールとか、得意のドライブのミスをするようになった。しかも、当たり前のようにしてていたから、これが年なのがなと思った。

——普通は、今まで動けていたのに動けなくなつたとか、ボールの威力が落ちて相手に返されるようになつたという時に年齢を感じるんじゃないの？

水谷 ぼくはそういうじゃない。凡ミスですね。それが執念なのかもしれない。昔だったら、凡ミスをすると、「ああ、なんでこんなミスをするんだ」と怒っていたのに、最近は凡ミスしても平然としてしまう自分がいるんですよ。1本1本に対しこんなミスをするんだ」と怒っていたの執念が落ちたのもしれない。

——4年前は全日本で吉村に負けて、オリンピックに行って、結果が良くなかった。だから今年は全日本で勝つてオリンピックに行く。だから勝たなければいけない大会だった。

水谷 そうですね。でも、あれはロンドンで負けて、メディアに「ロンドンで負けたのは全日本で6連覇を阻まれたからですね、負けた影響ですか」と聞かれた

から、「はい、そうですね」と答えただけですよ。実際は、そんなの気にして仕方がないでしょ。オリンピックはオリンピックだから。自分ではそうでもないでくもダメだと思います」と言いますよ。

——全日本で勝つのはうれしいですけど、ぼくの中では昨日（最終日の翌日）が今日くらいでうれしさは終わっています。もう全日本の熱は一日で過ぎ去りました。全日本で優勝した祝勝会をやろうと言わても、もうそんな気分じゃないで優勝直後の会見では「オリンピックでメダルを獲ります」ときっぱり言つていたけど。

水谷 正直、今はあまり考えられない。もちろんメダルは獲りたい。

——世界ランキングではほとんどの前と同じだけど、「一番強い時期の水谷が迎えるオリンピック」と言つていいのかな。4年前の自分と比べるとどうなんだろう。

水谷 4年前は自分に対しての甘さがあつたと思いますよ。あの時も、試合で負けた後に反省することがあって、技術的なこと以外でも改善することが多くあつた。身体のケアやメンタルとか、自分の未熟さを感じたので、今回はそこを改善していくと思う。

——この2年間、ロシアリーグに行つて、邱建新さんがコーチになつたことが大きかつたんじゃないかな。

水谷 大きいですよ。邱さんがコーチになつてから全日本も負けていないし、ワールドツアーグランプリファイナルでも優勝できただんですから。

——これからオリンピックまでの半年間は重いものかな。水谷隼にとつてオリンピックのメダルとは何だろう。

水谷 今はプレッシャーを感じていないう。大会もまだあるし、一つひとつがオリンピックのために、という気持ちになるし、行動や意識、練習や試合でも「今年はオリンピックがあるから」という意識でやりたいですね。オリンピックのメダルは自分の夢もあるし、家族やファンにとっての夢です。だから達成したいですね。

水谷 隼にとつて優勝の喜びや安堵感に浸る至福の瞬間が年々短くなっている。そして口から出るのは「怖いんですよ」という王者らしくない言葉だった。

まさにそのフレーズにこそ、チャンピオンの苦しみやアスリートとしての本音が見えた。怖いからこそ練習をするし、不安だからこそ身体をいたわるのだ。

水谷自身が言うように、彼の心に火をつけ、彼を奮い立たせるのは日本での強力なライバルの出現かもしれない。

「日本選手よ、甘えるなよ。早くオレに向かって来いよ、早くオレを打ち負かしてみろよ」

卓球王・水谷隼が発したのは、喜びの言葉ではなく、若手への挑発のフレーズだった。



KASUMI ISHIKAWA

THE CHAMPION'S INTERVIEW 2
CHAMP 2016

石川佳純
全農

「チャンピオンインタビュー」



「あとで考えると恐ろしいと思う試合がいっぱいあります。でも、コートに入ったら『やるしかない攻めるしかない』と思っています。逃げないで攻め続けた時には勝てますよね」

強い女王だった。

全日本選手権で失ったゲームは3ゲームのみ。

「石川時代」を印象づける強さを

石川佳純は全日本という舞台で見せつけた。

6年連続決勝へ進み、4度目の皇后杯を掲げた今大会。

2016年という五輪イヤーを石川は見事なスタートで駆け出していく。

聞き手=今野昇(本誌編集長)

interview by Noboru Konno

写真=江藤義典&奈良武

photographs by Yoshinori Eto & Takeshi Nara

この1年間は山あり谷ありで、いろいろなことを経験した1年でした。

全日本選手権の優勝の余韻に浸る間もなく、ハンガリーオープンとドイツオープンに旅立った石川佳純。リオ五輪日本チームには休息はない。

全日本優勝から2週間経ち、世界選手

権日本代表の壮行会の後、インタビューの時間を割いてもらつた。4回目の優勝

インタビュー。石川からは女王の自信と

リオ五輪に向けての決意が感じられた。

——全日本優勝から2週間経ちました。

石川 大会の2日後くらいに遠征に出発

したので、遠い昔のことのようですね。

——大会前の調子はどうでしたか？ 今回3種目ではなく2種目のエントリーでした。

石川 調子はまあまあでした。(去年の)3種目はあまりにハードだったので、今回吉村(真晴)君とも相談して2種目に絞りました。

——1年前の全日本の大会前と、1年後の今回の大会前と、どういふのは、自信とう部分で違っていたのかな。

石川 今回もまあまあ良かつたし、リオ(五輪)に向けて良いプレーをしたいと思っていました。去年は苦しい試合ばかりだったので、今回は楽しくと言ふか、自分の力を出し切れるような試合をしたかったし、あまり気負いもなかつた。

この1年間は山あり谷ありで、いろんなことを経験した1年だつたし、いろんな勉強ができました。どちらかと言えば苦しい1年ではありました。成績

だけでなく、初めてケガで試合に出られないことも経験したし、そこから学んだことも多かったです。いろんなことを見直すことができました。

——この1年の中で節目になる試合はどれでしょう。

石川 去年のワールドカップ(10月末)はすごく良いプレーがきました。ワールドツアードで負けることがあるし、良いプレーも悪いプレーもあるけど、ワールドカップから(調子を)上げてこれたと

思います。試合を重ねるごとに手応えはあります。リオに向けてやらなければいけないことはいっぱいあるので、今はそういう課題に取り組んだり、自分の良いところを伸ばしていきたい。

——全日本の話に戻りますが、スコア的には1ゲームを落としたのが3試合だけで、2ゲーム以上は取られていない。今までで一番強さと力を見せつけた全日本だったように思います。

石川 そうですね。4回の優勝の中では一番かもしれません。良いプレーはできていたし、競り合いは一番少なかつたということですね。今大会、私の調子が良い中で、6回戦の宋惠佳さん(中国電力)との試合が一番印象に残っています。宋さんがすごく良いプレーをしていて、4—1だつたけどもつと競っていてもおかしくない試合でした。ラリーも続いたし、宋さんはボールの威力もあって、強いな

と感じました。ベスト8決定で当たつているけど、当たるのがかなり早かつたなと思いました。良い内容の試合ができました。準々決勝はカットの佐藤瞳(札幌大谷高)選手だつたけど、カット打ちの練習はしていたのかな。

——準々決勝はカットの佐藤瞳(札幌大谷高)選手だつたけど、カット打ちの練習はしていました。

石川 いいえ、カット打ちの練習はほとんどしていませんでした。ただ、佐藤さんはワールドツアードでは何度かやつてました。佐藤さんは良いカットを打つのに注意してました。

——続く準決勝は、大方の予想は福原愛(ANA)選手だつたけど、加藤杏華(十六銀行)選手が逆転勝ちで上がってきました。福原さんが負ける試合は見ていましたか？

石川 見ていません。私は隣で試合をやってましたから。ピックリもしたけど、加藤さんは勢いもありましたね。2年前に私は彼女とやっていますけど、その時と全然違うんだろうなと思つていました。出足からスタートダッシュをかけたのが良かったので、4—0で勝てたんですね。

——決勝は誰が来るだろうという予想はあつたんだろうか。

石川 誰でもいいわけじゃないけど、目の前の試合を勝つことに集中してしまつた。だからあまり誰が来るとか……はなかつたかな。美宇(平野・JOCエリートアカデミー)ちゃんは準決勝で美誠(伊藤・スターツSC)ちゃんに4—0で勝っていたからすごく強くなっているんだろうなと思っていたし、思い切りの

良い攻める卓球になつて、プレースタイルも変わつてた。まずはバックハンドで初めてやって以来、2回目ですね。(美宇ちゃんの)卓球が変わりました。イメージが変わりましたね。すごく攻めてきて、積極的になつてたので、びっくりしました。

——何回目の対戦なんだろう。

石川 去年の8月のブルガリアオープンで初めてやって以来、2回目ですね。(美宇ちゃんの)卓球が変わりました。良い攻めで、毎年慣れることはないし、試合のペースが相手に行かないようになりますね。出足をしつかり抑えました。

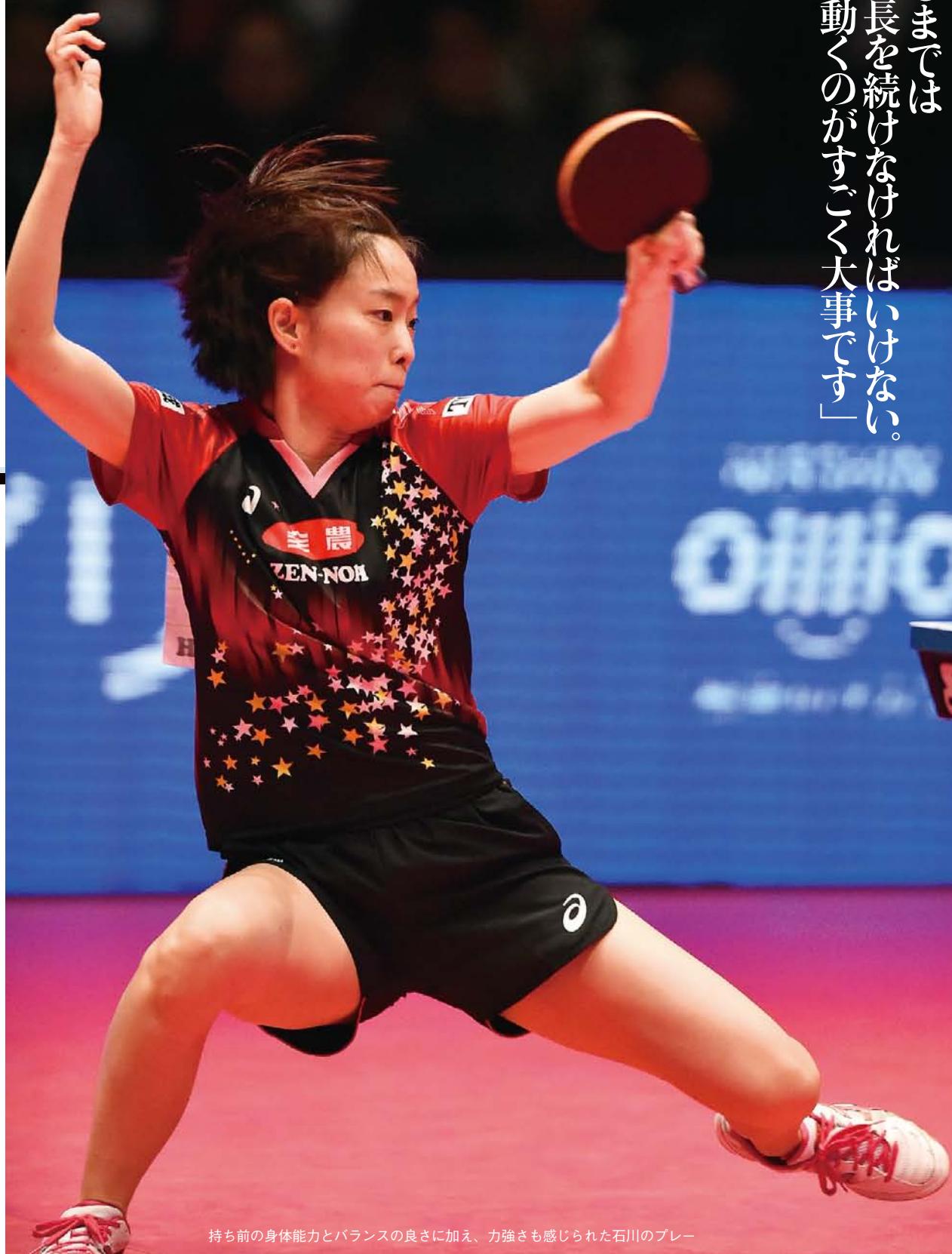
——3ゲーム目、6—8でリードされていて、そこから5本連取でゲームを取り、4ゲーム目は8—4でリードしているのにそこから逆転されて取られました。この3、4ゲーム目がポイントかな。

石川 3ゲーム目を挽回して取ったのが大きかったです。美宇ちゃんはラリーになつた時に思い切り攻めてきていたし、良いプレーが出てきていて前より強くなつてたと思います。決勝の舞台は特別だし、美宇ちゃんも緊張はしたと思うけど、私が初めて決勝に出た時には緊張よりもワクワクという気持ちのほうが大きかったです。

——石川さん自身は6年連続の決勝だから、慣れ親しんだ舞台ですか？

石川 いやいや、慣れ親しんではいいです(笑)。毎年慣れることはないし、緊張はするし、毎回その時の調子だつた。だからあまり誰が来るとか……はなかつたかな。美宇(平野・JOCエリートアカデミー)ちゃんは準決勝で美誠(伊藤・スターツSC)ちゃんに4—0で勝っていたからすごく強くなっているんだろうなと思っていたし、思い切りの決勝が楽しみでした。最近は日本でなかつた。

「卓球をやめるまでは
フィジカルは成長を続けなければいけない。
早く動く、強く動くのがすごく大事です」



持ち前の身体能力とバランスの良さに加え、力強さも感じられた石川のプレー

石川佳純は昨年は1月の全日本選手権で3度目の優勝を飾り、5月の世界選手権では混合ダブルスで銀メダルを獲得。ワールドツアーの連戦を重ねながら、9月にリオ五輪の日本代表の切符を手にして、世界ランキングも自己最高位の5位まで上げた。

しかし、左足の故障で9月下旬のアジア選手権を棄権した。故障やケガのない選手と言われてきた石川にとって想定外の故障だったが、10月末のワールドカップで見事に復活。日本選手として初の決勝へ進んだ。国際大会の連戦をこなしながら確実に力をつけていった1年間だった。



決勝で15歳の平野美宇と対戦(たいじ)する石川

苦しい時もあるけど、今は目標があるので、それに向かって楽しい気持ちを持つてやることが大切ですね

——終わった瞬間は？

石川 うれしかったですね。今年は涙は出でこなかつたけど、優勝できてすごくうれしいし、自信にもなる優勝でした。自分自身楽しみにしている大会だから良かったなと。特に表彰台に立っている時です。ここ（表彰台の真ん中）に戻つて来れて良かったなと思いました。ホント良かった。精神的にも体力的にも充実していました。もちろん全日本で勝つてリオに行きましたか？

石川 今年は調子も良かつたので自信を持つて最初から最後までできました。リオに向けても後悔のないようにやりたかった。精神的にも体力的にも充実してました。もちろん全日本で勝つてリオに行きましたか？

——1年前の森薗美咲戦の決勝と、今回の決勝とは違うものでしたか？

石川 今年は調子も良かつたので自信を持つて最初から最後までできました。リオに向けても後悔のないようにやりたかった。精神的にも体力的にも充実してました。もちろん全日本で勝つてリオに行きましたか？

——体も年々変化していると思うけど、どう変わっています。成長もしていますね。ここ（表彰台の真ん中）に戻つて来れて良かったなと思いました。ホント良かった。精神的にも体力的にも充実してました。今年は本当に充実でした。もちろん全日本で勝つてリオに行きましたか？

——でも石川さんはストイックでしょ。そう言われるでしょ？

石川 ストイックだと思わない。水谷君にそう言つていただいてありがたいけ

——昨年は9月に左足を故障して、アジア選手権を棄権しました。

石川 （故障で棄権したのは）初めてですね。自分の体のケアとか、体に対する考え方を改めて見直すことができた。完全に体が動けてこそ卓球なので、そこをもつともっと意識して、ケガとか病気をしないようにと自分自身勉強になりました。

——男子チャンピオンの水谷君は「石川はストイックだ」と言つていますが。

石川 水谷君もすごいじゃないですか。人が見ていないところで努力しているか

——体の感覚というのは小さい頃からどんどん変わっています。成長もしていますね。ここ（表彰台の真ん中）に戻つて来れて良かったなと思いました。ホント良かった。精神的にも体力的にも充実してました。今年は本当に充実でした。もちろん全日本で勝つてリオに行きましたか？

——でも石川さんはストイックでしょ。そう言われるでしょ？

石川 ストイックだと思わない。水谷君にそう言つていただいてありがたいけ

良いとか悪いとかをわかつていくことがケガを防いだり、調子が良い時と悪い時の波をなくす秘訣になるのかなと思います。

卓球をやめるまではフィジカルは成長を続けなければいけない。速く動く、強く動くのがすごく大事です。フィジカルはもつと鍛えなければいけない。

——ここまでレベルになると、ポンとレベルアップすることなく、何ミリ単位でじりじり上がっていくしかないね。

落ちる時は早いんですけど、上がるのには難しいですね。最近は改めて卓球の楽しさとか、試合の時に思いついたことをやるとか、楽しく工夫して好奇心を持つてやるもの武器になると思っていました。レベルが上がれば上がるほど安全にやろうと思つてしまふけど、自分が小さかった頃を思い出しても、もっと工夫してやつてみよう、相手のやりにくいことをやってみようと思ったことは大きい。自分より年下の中学生や高校生を見ていましたら、そういう頃の自分を思い出しました。苦しい時もあるけど、今は目標があるで、それに向かって楽しい気持ちを持つてやることが大切ですね。

——男子チャンピオンの水谷君は「石川はストイックだ」と言つていますが。人が見ていないところで努力しているか

「つらいと感じることも多いですよ。
絶対成功するまで諦めないで頑張ったのは、
その先に見えるものがあるからかな」



ど、全然、自分で思わない(笑)。ただ、楽しいから卓球にはまっているということです。つらいと感じることも多いですよ。ただ絶対成功するまで諦めないで頑張るのは、その先に見えるものがあるからかな。でも、ストイックじゃないですよ。いつも周りの方にいろいろ支えていただいている感じです。

——水谷君の新しい本の中で「チャンピオンは異常者だ」というフレーズがあります(笑)。

石川 えー、私は普通ですよ(笑)。

——「全日本決勝の大舞台、世界選手権の舞台、五輪の舞台で勝てる人は普通じゃない」と。

石川 試合が終わった時に「怖い」と思うんですよ。「あんな場所であんなプレーをしていたのか」と怖くなる時があります。09年の横浜大会で帖雅娜(ティエナ)に勝った時や、世界選手権東京大会での香港戦とか、あとで考えると恐ろしいと思う試合がいっぱいあります。でも、コートに入つたら「やるしかない、攻めるしかない」と思っています。逃げないで攻め続けた時には勝てますよね。

——他の選手と違う部分って何だろう。石川 そんなにないですよ。練習をいっぱいすることかな。

石川 いや、今でも「練習が好きです」とは言えないです(笑)。でもやります。

石川 そうですね、メチャクチャ負けず嫌いですね。自分で何が誇れるかと

言ったら、「負けず嫌い」が誇れます。ひとつのことにはまつたら、それに集中できる。とことんやりたい。負けず嫌い、負けたくないという気持ちが人一倍強いからここまでやつてこれた。

もうひとつは、「本当に強くなりたい」という気持ちが強いんです。いつも「強くなりたい」という気持ちで練習している。単純に、強くなりたい、うまくなりたいと考えているから、「じゃ、今度この練習をしようかな」と思える。課題が毎日見つかると楽しいじゃないですか。ただ練習をやるのはつまらないです。練習での(課題や上達の)意識がなかつたらボールが打てないし、集中した練習じゃなかつたら時間がもつたまらない。

——「練習嫌いの石川」が、いつそんなに「練習をする石川」に変わったんだろう? 石川 10年のモスクワでの世界選手権が終わった時です。その時に平野(早矢香)さんとか福原さんと団体戦に一緒に出て、オリンピックに出ようと思つたらその二人よりも上に行かなきゃいけない。できるかどうかわからないけど、できるところまで頑張つてみようと思った。オリンピックをきっかけに大きく変わったと思います。

私の中ではオリンピックは大きな存在ですね。日本で3人しか出られないんですよ。しかも2人しかシングルスには出られない。そう思うと、やっぱり、私はロンドンとリオに出ることはできたけど、出れない人もたくさんいて、その人たちの分も頑張らないといけないと最

近思います。オリンピックは出ることがメチャクチャ大変だから。

——ロンドンではシングルスで準決勝まで行った、団体では銀メダルを獲った。

その時の残像が残っている中で、今回のリオは全く違うものになるんだろうか。

石川 残像は残っていますよ。でもリオは全く違うものになると思っています。その経験を生かしてというよりは4年後の新しい自分で挑戦したい気持ちですね。

ロンドンの時、19歳だったけど、そこからの4年間はすごい大きいですね

——陳莉莉(ちん・りり)さんのコーチング、特に女子選手においてコーチの影響は大きいと思うけど。

石川 オリンピックは4年に1回しかないので、後悔しないように自分のできる限り道するべを教えてくれます。一緒に戦っているので陳さんは私を助けてくれる存在です。もちろん最後にやるのは自分だけど、大きな支えだからいろいろなことを教えてくれます。厳しいんですよ、優しいだけのコーチではない(笑)。

ただ、ベンチで怒っているわけではないし、言い合っているように見えるかもしれないけど、そうではない。お互いの信頼関係ができますから。

——リオ五輪まであと半年ですね。

石川 オリンピックは4年に1回しかないので、後悔しないように自分のでき



優勝を決め、ベンチで陳莉莉コーチと抱き合う石川

石川 もう2年半くらいですね。(コーチを受ける)時間が長くなればなるほど、自分の良い時、悪い時を見ているので、悪い時は悪いなりにどうすればいいのかと道するべを教えてくれます。一緒に戦つてるので陳さんは私を助けてくれる存在です。もちろん最後にやるのは自分だけど、大きな支えだからいろいろなことを教えてくれます。厳しいんですよ、優しいだけのコーチではない(笑)。

ることは全部やつてあの舞台に立ちたい。本当に特別な舞台だと思うので、自分でできる準備を全部やつて臨みたい。

— からの半年間の「プランニング」はもうでき上がっているんですね。

石川 ありますよ。言わないんですけど（笑）。やっぱり自分の良いところを伸ばすということじゃないですか。

— 4年前の自分より強くなっているという自信とか手応えは確実にあるでしょ？

石川 ロンドンの時、19歳だったけど、そこからの4年間はすごく大きいですね。たまに自分が成長できるかなと思うこともあるし、まだまだダメだなと思

うういうのを何も気にせず戦えるようになります時間もかかります。経験を積んで

きて、自分が年下の頃は向かっていく立場でしたけど、向かってこられる立場にどんどん変わってきて、その中で学んだ

う時のほうが多いけど、いろいろなことが気にならなくなつた。自分自身、成長している部分もありますね。

経験は財産ですね。今までのいろんな経験が生きています。試合は40分聞くらいだけど、それまでの経験や、コートに入るまでの努力、練習してない時の努力が試合に影響するんだなというのを4年間で学びました。コートに入つたら年齢も何も関係ないじゃないですか。そういうのを何も気にせず戦えるようになります時間もかかります。経験を積んで

い」と思っていた。

今はいろいろ経験して、1周回つてきました感じで、ポジティブな気持ちというか、挑戦者の気持ちを持つてワクワクした気

「自分の中で何が誇れるかと言つたら、『負けず嫌い』が誇れます。ひとつのことにはまつたら、それに集中できる。こととんやりたい」とことんやりたい

持ちでやりたい。後悔しないようにやり切りたいと思っています。

— 4年間は早かつた？

石川 早いです。

— ロンドンが終わつた時には、これから4年もあるんだと思ったでしょ？

石川 思いました。ロンドンからオマでの4年は長かったです。ロンドンからの2年は早かつたけど、いろんな経験がありましたがね。これから半年間頑張ります。

— 今日はありがとうございました。

希に見る才能と希に見る努力。

天才・水谷隼をして「石川はストイツ

クだ。すごい選手だ」と言わしめるほどに、類い希な打球センスを持ちながら努力することを怠らない。そして本人曰く「その先に見えるものがあるから頑張れる」と。

その先にあるものは4年に1回しか訪れない。

全日本選手権はすべての卓球人が緊張に身を震わせ、勝利と敗戦に悔し涙とうれし涙を流す舞台だ。今年、石川佳純はその「全日本」で圧勝した。その先に見える大きな目標に向かう彼女は、この国内最大のビッグゲームを優勝という結果で越えていった。

■(文中敬称略)